フィリピンカーニバルから極東オリンピックへ

―スポーツ・民主主義・ビジネス―

高　嶋　　航

はじめに

> オリンピアードは民主主義そのものだ……詩人たちの「女性的で光り輝く東洋」は消え去り、たちまち一般市民〔common man〕の勃興と国民同士の連帯が取って代わった[1]。
>
> 競技場での勝利は勝利者に成功の芽生えを告げ、のちの人生でのさらに大きな勝利を示すのであります。……太平洋のこちら側の人々が互いを理解し、緊密なビジネスの関係を築いていけば、太平洋の広大な水の砂漠は、やがてこれらの国々の国際貿易を営む船舶で活気づくことでしょう[2]。

最初の引用は、1913年1月31日にマニラで極東オリンピックが開かれたときに『フィリピンズ・フリー・プレス』がその一面に掲載した絵入りの社説のなかの一節である。2つめの引用はフィリピン総督フォーブズ（W. Cameron Forbes）が極東オリンピックの表彰式で語った言葉である。ここで用いられている比喩のジェンダー的視点は興味深いが[3]、本稿はむしろ極東オリンピックが民主主義やビジネスと結びつけて語られた

---

1 "The New Olympian. Los Nuevos Juegos Olímpicos," *Philippines Free Press*, February 1, 1913.

2 *Manila Times*, February 10, 1913. 言葉遣いは新聞・雑誌によって若干差異があるものの、ビジネスとスポーツの結びつきは、彼の文章や演説の随所に見られる。

3 Stefan Hübner, "Images of Sportive 'Civilizing Mission': The Far Eastern Championship Games（1913-1934）and Visions of Modernization in English-Language Philippine Newspapers," *Journal of World History*, vol. 27, no. 3, 2016. フィリピン・アメリカ戦争そのものをジェンダーの視点から読み解いた著作に Kristin L. Hoganson, *Fighting for American Manhood: How Gender Politics Provoked the Spanish-American and Philippine-American Wars*, Yale University Press, 1998 がある。なお中国を対象としたものだが、筆者の植民地主義と男性性に関する見解は、拙稿「「東亜病夫」とスポーツ：コロニアル・マスキュリニティの視点から」（石川禎浩、狭間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都大学人文科学研究所、2013年所収）、

背景について考えてみたい。

筆者はこれまで極東選手権競技大会（極東オリンピックの第２回以降の名称。以下、極東大会と略す）に関する研究をいくつか発表してきた。しかし、1913 年の極東オリンピックについては、初期の極東大会の推進者であった YMCA の視点から極東大会の歴史を概観した「極東選手権競技大会と YMCA」のなかで触れたものの、紙幅の関係で十分に論じることができなかった[4]。近年、シュテファン・ヒュブナーは、キリスト教的国際主義、キリスト教的平等主義、「プロテスタント的職業倫理」という３つの指標から、YMCA によるスポーツを通じた「文明化の使命（Civilizing Mission）」と極東大会の関係を考察した研究成果を次々と発表している[5]。筆者も彼の一連の研究には基本的に同意している。

ただし、これまでの極東オリンピック、あるいはその舞台となったフィリピンにおけるスポーツ史研究は、植民者であるアメリカ人の視点に立ち、スポーツが導入され

拙稿「「東亜病夫」と近代中国（1896-1949）」（村上衛編『近現代中国における社会経済制度の再編』京都大学人文科学研究所、2016 年所収）を参照。東洋人を「病人」とみなす事例はフィリピンでも見られる。たとえば、本文で後述するブレント主教はフィリピン人を「身体的にも道徳的にも病気」だと考えていた（Gerald R. Gems, *Sport and the American Occupation of the Philippines*, Lexington Books, 2016, p. 112）。

4 拙稿「極東選手権競技大会と YMCA」（夫馬進編『中国東アジア外交交流史』京都大学学術出版会、2007 年所収）、拙稿「「満洲国」の誕生と極東スポーツ界の再編」『京都大学文学部研究紀要』47 号、2008 年 3 月、拙著『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012 年。

5 Stefan Hübner, "'Making the Weak and Degenerated Races of East Asia Ready for Self-Government': American and East Asian Views of Sport and Body in Early Twentieth-Century East Asia," in Walter Demel and Rotem Kowner eds., *Race and Racism in Modern East Asia*, vol. 2: Interactions, Nationalism, Gender and Lineage, Brill, 2015; Stefan Hübner, "Muscular Christianity and the 'Western Civilizing Mission': Elwood S. Brown, the YMCA and the Idea of the Far Eastern Championship Games," *Diplomatic History*, vol. 39, no. 3, 2015; Stefan Hübner, "Uniting the East via Western Amateur Sports Values: Asian Integration, the Olympic Ideal and the Far Eastern Championship Games," in Marc Frey and Nicola Spakowski eds., *Asianisms: Regionalist Interactions and Asian Integration*, NUS Press, 2015; Stefan Hübner, "Donors and the Global Sportive 'Civilizing Mission': Asian Athletics, American Philanthropy, and YMCA Media（1910s-1920s）," *Itinerario*, vol. 40, no. 1, 2016; Stefan Hübner, "Images of the Sportive 'Civilizing Mission,'" in Stefan Huebner, *Pan-Asian Sports and the Emergence of Modern Asia*, NUS Press, 2016. このほか極東大会そのものに関する研究も多数あるが、ここではいちいち挙げない。

た意図や背景、その意義などが論じられてきた[6]。それは一言でいえば、「文明化の使命」であろう[7]。しかし、フィリピンにいたアメリカ人がみな「文明化の使命」を自任していたのだろうか。また、フィリピン人は果たして「文明化の使命」を額面通りに受けとめたのだろうか。スポーツの面から植民地におけるヘゲモニーの様態を解明した研究はまだない。その最大の要因は、フィリピン人の視点をうかがうことのできる資料、具体的にはスペイン語やタガログ語の資料がほとんど利用されていないことにある。本稿は非英語資料（主にスペイン語）を活用し、極東オリンピックの誕生のプロセスを多面的に検討することを主たる目的とする。

具体的には、極東オリンピックとその母胎であるフィリピンカーニバル（以下、カーニバルと略す）に関する言説から、スポーツを通じた植民地支配の強制とそれへの抵抗――スポーツを通じてフィリピン人の「文明化」を試みたアメリカ人と、それを部分的に受け入れながらも、「文明化」の達成を主張してその清算を図ろうとしたフィリピン人の間のせめぎ合い――を読み取る。そのさい、バーバのいう植民地的擬態（ほとんど同一だが完全には同一でない）の概念が重要になる[8]。フィリピン人は擬態を通して植民地支配を戯画化し、その権威を攪乱しようとした。フィリピン・ネイションを可視化できる国際スポーツ競技会はこのような植民者の支配と被植民者の抵抗の格好の舞台となった。もっとも、スポーツをめぐる力学はたんに植民者と被植民者の間

---

[6] フィリピンのスポーツに関する主な先行研究を挙げる。Gerald R. Gems, *The Athletic Crusade: Sport and Colonialism in the Philippines: Bats, Balls, and Bayonets*, University of Nebraska Press, 2006; Gerald R. Gems, *Sport and the American Occupation of the Philippines*; Janice A. Beran, “Americans in the Philippines: Imperialism or Progress through Sport?” *The International Journal of the History of Sport*, vol. 6, May 1989; Lou Antolihao, *Playing with the Big Boys: Basketball, American Imperialism, and Subaltern Discourse in the Philippines*, University of Nebraska Press, 2016; 小幡壮「植民地主義と近代スポーツ：フィリピンにおけるスポーツの発展と衰退」『静岡県立大学国際関係学部研究紀要』14 号、2001 年。

[7]「文明化の使命」は、イゴロト族が首狩りを止めて野球をするようになったとか、モロ（フィリピン人ムスリム）がボロ（大鉈）を野球のバットに代えたといったエピソードによく現れている。アメリカに頑強に抵抗したモロにとってボロは男性性の象徴であったが、アメリカにとってそれは野蛮の証であった。バットは、モロがアメリカの支配に服従し、文明化したこと、あるいは伝統的な男性性を否定された彼らがその男性性を誇示するための新たな形式を意味した。

[8] ホミ・K・バーバ著、本橋哲也、正木恒夫、外岡尚美、阪元留美訳『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局、2005 年。

だけで作用していたのではない。本稿は、アメリカ人、スペイン人、フィリピン人の関係、さらにYMCA、植民地政府、教育局、陸軍、商人などアメリカ人内部の諸アクターの差異にも着目したい。

以下、第1章ではカーニバルの創設と展開を論じる。先行研究では極東オリンピックの創設とその後の発展に果たしたYMCAの役割に焦点が当てられてきた。たしかにYMCAは最大の推進者ではあったが、創設者の一部を代表するにすぎない。これに関連して、なぜYMCAが極東オリンピックを新たに創設するのではなく、カーニバル競技会の一企画として実施したのかという問題はほとんど注目されてこなかった。本章では、カーニバルの設立から極東オリンピック開催までの経緯をたどることで、従来とは違った角度から極東オリンピック創設の意味を考える。それによって、YMCA中心の極東オリンピック像を相対化することができよう。

第2章は極東オリンピックの全容の復元につとめる。1913年の極東オリンピックは、その後の極東大会と違って、基本的な事柄（選手がどのように選抜されたか、だれがどの競技に参加したのか、それぞれの競技の結果はどうだったのか）すら不明な点が多く残されたままになっている。たとえば1934年に大日本体育協会が「極東選手権競技大会史」を作成したとき、極東オリンピックについては「全貌は詳らかには判らぬ」とさじを投げるほかなかった[9]。こうした状況を踏まえ、本章では各種資料をつきあわせつつ、できるかぎり正確なデータを提示する。

第1章　フィリピンカーニバルの創出

リサール追悼記念日とフィエスタ

1896年12月30日、ホセ・リサール（José Rizal）はカティプーナン（フィリピン独立を掲げる秘密結社）の「反乱」を煽動した罪を問われ、スペイン植民地政府により処刑された。死は国民的英雄としてのリサールの始まりでもあった。キブイェンが明らかにしたように、リサールのイメージはその死後さまざまな人々によって「盗用」

[9] 大日本体育協会編『第十回極東大会報告書』大日本体育協会、1934年、3頁。

された[10]。スペインに代わって新たな支配者となったアメリカ植民地政府にとって、民族意識を鼓舞するリサールのイメージは都合の悪いものだった。そこでアメリカ人たちは、リサールが目指したのは革命（1898年以降はアメリカからの独立を意味した）ではなく、スペインのもとでの同化による改革だったとする「アメリカ版公定リサール像」を作り上げていく。アメリカはスペインに代わってリサールの未完の改革を成し遂げる役割を担ったと解釈することでその植民地支配を正当化したのである。

リサールを追悼する最初の式典は1898年12月30日、アギナルド（Emilio Aguinaldo）が率いる革命政府のもとで開かれた（アギナルドは 翌年1月23日にフィリピン共和国初代大統領に就任する）。リサールの追悼は最初から革命と結びついていた。アメリカ植民地政府は1902年2月1日にこの日を公共の祝日として、革命との結びつきを断とうとしたが、リサール追悼記念日の性格は1904年になってもそれほど変わっていなかった。イロイロでリサール追悼記念日を見たイギリス人女性ドーンシーは、その翌日に次のような手紙を記している。

> 昨日とりおこなわれたリサール追悼記念日――リサール博士というフィリピン人の国民的英雄を追悼する日――と呼ばれるフィリピンのフィエスタについてお聞きになりたいと思われるかもしれません。リサールはいわばフィリピンのウィリアム・テルです……フィリピン人たちは自分たちの自由、自分たちの道を獲得するためにアメリカ人たちと戦ってきたし、いまもなお激しく戦っているのに、彼ら自身が何を考えているのか尋ねられることすらまったくなく、それどころか、彼らが少しでもこのアメリカの桎梏を除こうと望み、自分たちの仕方で統治する兆候を見せようとするものなら、反逆者と呼ばれてなぐり殺されたり、たちの悪い盗賊と呼ばれて木につるされるのです。このような成り行きのために、現地住民たちはこの追悼記念の機会を捉えて、自分たちの愛国的感情をいくらかでも落ち着かせようとするのです。この日は公共の祝日であり、彼らは旗とともしびをもち、フィリピン人は誰でもみな、もともとわずかしかやらない仕事さえ

[10] フロロ・C・キブイェン「リサールとフィリピン革命」（レイナルド・C・イレート、ビセンテ・L・ラファエル、フロロ・C・キブイェン著、永野善子監訳『フィリピン歴史研究と植民地言説』めこん、2004年所収）。

も休みにして、通りを練り歩いてはつばを吐き、楽器をもっていない人たちはみな、鶏を闘鶏に連れて行ったり、闘鶏から出てきたりしています。……まあ、これがフィエスタなのです[11]。

ここには「アメリカ版公定リサール像」とは違ったリサールの姿、すなわちまだアメリカに盗用されていないリサールの姿を見いだすことができる。こうして、アメリカ支配のもとで自らを表象することも代表することもできず主体性を喪失し他者から定義される存在となるのを迫られたフィリピン人は、フィエスタ（fiesta）という非日常的な時間、秩序の転倒した世界のなかで、「反社会」的活動を通じてその主体性を回復しようとしたのである。そこには必然的に民族主義的感情の噴出が伴った。1900年6月、マニラに居を定めてまもないアメリカ人女性モーゼスは、多くの士官たちはフィエスタが大規模な蜂起の仮面になっていると考えているようだと述べた。アンダーソンが言うように、フィエスタは「アメリカの植民地近代性を顛覆するための粗野で開かれた場」だった[12]。1909年になっても、「さまざまな公の広場で、以前にもまして率直な演説がいくつか聞かれた。いわく、リサールに倣え、血を流すことを恐れるな、と。1910年のリサール追悼記念日も同じように心の奮い立つものであった。1911年の伝統的なパレードには、リカルテ将軍〔Artemio Ricarte〕の秘密部隊さえ参加した」。イレートはこうした追悼記念日でのリサールの盗用と対抗的盗用のせめぎあいを「さながら「もうひとつの政治」がおこなわれる場所」だったと述べる[13]。アメリカ植民地政府はこのような危険なフィエスタを飼い馴らし、社会秩序安定のための道具へと転換する必要があった。

実際のリサール追悼記念日はどのようなものだったのか。最初のカーニバルが開催される直前、すなわち1907年12月30日の様子を紹介しよう。その前々日、『マニラ・

---

[11] Campbell Dauncey, *An Englishwoman in the Philippines*, John Murray, 1906, pp. 50-52. 訳文はフロロ・C・キブイェン「フィリピン史をつくり直す」（レイナルド・C・イレートほか『フィリピン歴史研究と植民地言説』309-311頁）に依拠した。

[12] Warwick Anderson, *Colonial Pathologies: American Tropical Medicine, Race, and Hygiene in the Philippines*, Duke University Press, 2006, p. 121.

[13] Reynaldo Ileto, “Orators and the Crowd,” in Peter Stanley ed., *Reappraising an Empire*, Harvard University Press, 1984, p. 94（フロロ・C・キブイェン「フィリピン史をつくり直す」所引）。

タイムズ』はリサールにちなんだ2篇の作文を掲載した。そのうちの1篇は小学生ビセンテ・ディアスによるものである。リサールは「フィリピン人が明るい未来に対する全ての希望を託す人物だった。彼はスペインと祖国の政府に忠実だった。彼は生涯、典型的な平和的市民だった」。彼が処刑されたのは、たんに「自らの国を愛するという罪」のためだった。リサールが長生きしていれば、アメリカによって彼の国にもたらされた幸せな変化に狂喜したであろう、と[14]。典型的な「アメリカ版公定リサール像」である。この文章が本当に小学生の手によるかはさておき、追悼記念日に先立ってこのような公定版リサール像が提示された意図は明らかであろう。

リサール追悼記念日はパレードで幕を開けた[15]。午前7時30分に先頭がビノンドを出発、最後尾が式典会場のルネタ（リサールが処刑された場所）に到着したのは午前11時であった。ルネタには演壇が設けられ、フィリピン議会議長オスメーニャ（Sergio Osmeña）、同議員のケソン（Manuel L. Quezon）とハランドニ（Nicolas Jalandoni）、そしてスミス総督（James F. Smith）が演説をした。オスメーニャとスミスはアメリカ人とフィリピン人の良好な関係に言及し、リサール追悼記念日が「共通する感情の絆のもとで2つの民族を結合させる」のに重要な役割を果たしたと述べた。「ハーモニー」はリサール追悼記念日のキーワードだった。スミスはさらにリサール追悼記念日がもはやフィリピン人だけのものではなく、アメリカ人や自由を愛好する全ての人々に開かれていると述べた。リサールはフィリピン・ナショナリズムから切り離され、フィリピンの英雄から人類の英雄になった。こうして民族対立の現実は覆い隠された。

リサールを記念するモニュメントのデザインが国際的なコンペで選ばれたのも、脱フィリピン化の一環であろう。1908年1月8日にコンペの結果が発表され、イタリア人ニコリが一等賞、スイス人キスリングが二等賞に選ばれたが、最終的にはキスリングのデザインが採用された。キスリングはウィリアム・テルのモニュメントのコンペで優勝したことがあるという[16]。リサールのモニュメントは1913年のリサール追悼記念日に完成し、現存する。

---

[14] *Manila Times*, December 28, 1907.

[15] *Manila Times*, December 31, 1907.

[16] *Manila Times*, January 8, 1907.

極東オリンピックとの関連で興味深いのは午後のプログラムである。午後にはウォーレス競技場で野球とサッカーが、またパコ球場でもサッカーの試合が実施された。ただし、フィリピン人は参加していなかったと思われる。フィリピン人のスポーツ競技会がリサール追悼記念日の恒例行事となるのは、もうすこしあとのことである。

このほか、リセオ・デ・マニラの生徒200名による軍事訓練も実施された。アメリカ人にとって彼らは自治の基礎あるいはアメリカの「文明化の使命」の成果を象徴するものだったが、フィリピン人にとっては独立の象徴であった[17]。

こうして、アメリカ人とフィリピン人はそれぞれのリサール追悼記念日を祝福し、「もうひとつの政治」を繰り広げた。本来、フィエスタのような祝祭は社会に対する不満を噴出させることで逆に社会を安定させる装置であった。しかし、反植民地戦争の継続という状況のもとで、それは本当の秩序逆転をもたらしかねない危険なものだった。アメリカ植民地政府はこれを飼い馴らそうと試みたが、1912年になっても、リサール追悼記念日の式典は「政治的あるいは宗教的性格を帯びるべきではなく、組織や個人の側で宣伝や示威をするための適切な機会」ではないと念を押す必要があった[18]。アメリカ植民地政府は既存のフィエスタを飼い馴らすだけでなく、新しい模範的なフィエスタを創設することで、「もうひとつの政治」の影響力を弱めようとした。それが次節で論じるカーニバルである。

フィリピンカーニバル創設の目的

1907年8月29日の夜、植民地政府、陸海軍、マニラ商業組合（Manila Merchants' Association）、マニラの商業、報道関係者の代表がマニラのメトロポールホテルに集い、東西カーニバル（The East and West Carnival）を開催するための委員会を設立した。委員長には発案者のラングホーン大尉（George T. Langhorne）が選出された。「東西カーニバル」という名称は示唆的である。東洋と西洋の「ハーモニー」、言い換えるならアメリカ植民地政府のもとでの平和こそ、このカーニバルが創設された表向きの目的で

[17] *Manila Times*, December 31, 1907. 拙稿「軍隊と社会のはざまで：日本・朝鮮・中国・フィリピンの学校教練」（田中雅一編『軍隊の文化人類学』風響社、2015年所収）。

[18] *Manila Times*, December 28, 1912.

あった。委員会によれば、カーニバルの目的は4つあり、(1) 東洋にいる外国人とアメリカ人・フィリピン人の間の親交を促進すること、(2) フィリピンの人々にフィリピンの可能性について啓発すること、(3) カーニバルと博覧会が提供する広告を通じてフィリピンの産業を促進すること、(4) フィリピン諸島でこれまでで最大のフィエスタにおいて3日間の堅実な娯楽を提供すること、であった[19]。このうち (4) は別の言葉でいえば、危険なフィエスタの「健全化」であった。

9月9日にふたたび会議が開かれ、委員会は「フィリピンカーニバル協会」に改編され、名誉会長にスミス総督、副会長にウッド将軍 (Leonard Wood)、第二名誉副会長にヘンプヒル提督 (Joseph N. Hemphill) を迎え、役員にはマニラ市長ロハス (Felix Roxas y Fernandez) をはじめ、政財軍界の有力者が名を連ねた。このときスミスが「カーニバルは楽しみのためのように思われるけれども、それは実際にはビジネスのためである」と述べ、ウッドが「我々が欲しているのは商業的自信である」と語ったように、カーニバルはまずもって商業的な目論見から創設されたのである[20]。

じつは、カーニバルの創設会議の前日、すなわち8月28日の夜、ほぼ同じ顔ぶれが集まってマニラ商業組合の創立を祝うパーティが開かれていた[21]。このマニラ商業組合が最初に打ち出した事業がカーニバルの開催であり、カーニバルがあたかも産業博覧会のごとき様相を呈したのも当然のことであった。

スミスとウッドが商業の振興を第一に考えていたのに対して、公教育大臣シャスター (W. Morgan Shuster) は、「反帝国主義者は政府が人々の心を抑圧や苦痛からそらすために案出した計画だと説明するだろう」と政治的、軍事的目的を示唆するような発言をしている[22]。そもそも、カーニバルを発案したラングホーンは植民地行政に強い関心

---

[19] *Manila Times*, August 31, 1907. 娯楽の健全化という点でいえば、植民地政府はすでに民族主義的演劇をアメリカへの敵愾心を煽るとして禁止していた (Vicente L. Rafael, *White Love and Other Events in Filipino History*, Duke University Press, 2000, pp. 39-51)。

[20] *Manila Times*, September 10, 1907.

[21] *Manila Times*, August 20, 1907. その前身であるアメリカ商業会議所 (American Chamber of Commerce) は1901年秋に設立されていたが、活動停止状態だった (Frank H. Golay, "Special Manila Americans' and Philippine Policy: the Voice of American Business," in Norman G. Owen ed., *The Philippine Economy and the United States: Studies in Past and Present Interactions*, University of Michigan Press, 1983)。

[22] *Manila Times*, September 10, 1907.

を持つ軍人で、1899年にフィリピンへ赴任する途次、ロンドンのイギリス植民地省でマレーに関する資料を調査し、1904年にはジャワ、サラワク、シンガポール、マレー連邦などイギリス、オランダ植民地を視察していた[23]。ラングホーンの関心から考慮するなら、カーニバルが目的とする経済的発展は政治的、軍事的混迷を打開する鍵であった。実際、1908年の『フィリピン便覧』は次のように述べている。

> フィリピンの人道的、経済的（いわゆる政治的）諸問題の解決は、住民の物質的繁栄にかかっている。……賢明なフィリピン人実務家と聡明な外国人観察者の意見は、諸島の商業的発展によって全てのいわゆる「諸問題」が消滅するであろうという点で一致している。……諸島が発展するにつれ、無益な政治的議論は少なくなっていくであろう[24]。

このような政治的目的をよりよく貫徹するために、カーニバルの非政治性がたびたび強調された。カーニバル推進派の『マニラ・タイムズ』も「カーニバルは本質的に民衆の催しであり、それに関係している官僚たちでさえ公的な立場ではなく私的な立場で働いている」と弁明している[25]。このように、カーニバルには政治的軍事的意図が秘められていたのであり、それを理解するには、当時の時代背景を押さえておく必要がある。

1898年4月25日、米議会はスペインに宣戦布告し、米西戦争が始まった。戦争に備えて香港にいたアメリカ海軍は、フィリピンの革命派領袖アギナルドを連れてマニラに向かい、同地を占領した。その後、米軍とフィリピン軍の間で戦闘が勃発、いわゆるフィリピン・アメリカ戦争が始まった。1901年3月末にアギナルドはファンストン（Frederick Funston）の奸計に陥り逮捕される。ファンストンはフィリピン人への野球の普及に力を注いだ人物であるが、彼がアギナルドを逮捕した手段はスポーツマンらしいものではなかった[26]。まさに戯画としか言いようがないこの理念と現実の乖離

---

[23] Julian Go and Anne L. Foster ed., *The American Colonial State in the Philippines: Global Perspectives*, Duke University Press, 2003, p. 118.

[24] Hamilton M. Wright, *A Handbook of the Philippines*, A. C. McClurg & co., 1908, pp. xv-xvi.

[25] *Manila Times*, February 29, 1908.

[26] Robert Elias, *The Empire Strikes Out: How Baseball Sold U. S. Foreign Policy and Promoted the American Way Abroad*, The New Press, 2010, pp. 44-45. アメリカ人はフィリピン人の採るゲリラ戦法を道義に反し、不誠実で、卑怯で、文明的な戦闘方法に反していると考えていた（Gerald

は、このあと触れるように、アメリカの植民地であるフィリピンにありふれた光景であった。

1902年7月4日、アメリカの独立記念日にセオドア・ローズヴェルト大統領はフィリピン反乱終息を宣言した。これと前後して、植民地の領有の是非につき、アメリカ本国では激しい論争が起きていた。プロテスタント教会指導者、ビジネスマン、そして軍はフィリピンを教化、市場、戦略基地として歓迎した。一方、鉄鋼王カーネギーはフィリピン領有に対して、「アメリカ」の伝統から逸脱するとして反対した。「彼らに独立を禁じておきながら、我々が独立宣言をフィリピンの学校に掛けるなんて、どんな顔をしてやれるのか」と彼は問いかけた[27]。この自己矛盾を覆い隠すためにマッキンリー大統領が用いたのが、「恩恵的同化（benevolent assimilation）」というレトリックであった。それによれば、アメリカはフィリピンをスペインの植民地支配から解放し、彼らを文明化するという道徳的使命を果たしているのであった。それはフィリピン人にとって「恩恵」であるはずだったが、彼らはこの「恩恵」を拒否し続け、反乱終息が宣言されてからも戦闘は止まなかった。反乱を徹底弾圧すべく制定された山賊討伐法はこの年の11月2日に制定された。表向きには反乱が終息したことになっていたため、「山賊」と呼びかえられたが、その実態が変わったわけではない。一方で「フィリピン人のためにフィリピン」を唱え、他方で容赦ない弾圧を実施するというアメとムチの政策によって、アメリカは徐々に支配を固めていった。

革命軍の首領サカイ将軍（Macario Sakay）がまたしても奸計によって逮捕されたのは1906年7月の末であった（翌年9月に処刑）。その1年後にフィリピン初の議会選挙がおこなわれた。その結果、「即時独立」を綱領に掲げる国民党（Partido Nacionalista）が大勝した。選挙に勢いを得て、8月11日にはマニラで反米デモが繰り広げられた。ただし、パレデスが「アメリカの保護の結果」だと指摘したように[28]、国民党の勝利は、フィリピンのイルストラード（有産知識階層）がアメリカの植民地支

R. Gems, *Sport and the American Occupation of the Philippines*, p. 48）。

[27] Andrew Carnegie, “Distant Possessions: The Parting of the Ways,” in Andrew Carnegie, *The Gospel of Wealth*, The Century Company, 1901, p. 160.

[28] Ruby R. Paredes, “The Origins of National Politics: Taft and the Partido Federal,” in Ruby R. Paredes ed., *Philippine Colonial Democracy*, Ateneo de Manila University Press, 1989.

配に本気で対抗しようとしていたことを示すものではない。アメリカは「文明化の使命」を掲げていた関係上、またイルストラードは支配的地位を確保する必要から、ともにフィリピン議会を必要としていた。そして後者は、反米闘争が継続するなかでアメリカとの協力の道を選択するにあたって、「即時独立」という非現実的な主張を掲げざるをえなかったのである。カーニバルが発起されたのはまさにこうした時期であり、それはフィリピン議会をめぐるアメリカ人とフィリピン人の（表面的な）対立を補完し植民地支配を強化する役割も担っていたのである。

女王コンテスト

カーニバル開催までの期間、最も注目を集めたのが、カーニバルの主役である女王を選ぶコンテストであった。その方法は、新聞・雑誌に印刷されたクーポンに候補者の名前を書いて、所定の場所に投函し、得票の多寡を競うものであった。投票は1907年12月上旬から始まり、翌年1月15日が締め切りであった。12月19日の時点で、総数15,000票のうち、ジョーンズ夫人（Mrs. Henry M. Jones）が4,163票を集めてダントツのトップで、以下、バルダサノ（Maria Baldasano）が1,882票、ベック夫人（Mrs. Israel Beck）が1,080票、リムハップ（Leonarda Limjap）が698票、ビリャヌエバ（Purita Villanueva）が523票であった。レオナルダ・リムハップの父マリナオは著名な中国系実業家で、フィリピン革命に参加し、リサールのモニュメント建設委員会の一員であった。レオナルダはのちにリサールの甥と結婚することになる[29]。

この開票結果を受けて、『ムリン・パグシラン』（『レナシミエント』のタガログ語欄）はフィリピン人読者に対し、リムハップに投票しようと呼びかけた[30]。女王コンテストはあたかも民族対抗戦の様相を呈してきたのである。人口数からみて少数派のアメリカ人候補者が多くの票を得たのは、カーニバルが当初アメリカ人社会の中で盛り上がっていたこと、そしてコンテストに参加したメディアの多くがアメリカ系だったことに

---

[29] マニラカーニバルのHPによれば、フォーブズ総督がマリナオに娘の出馬を働きかけ、マリナオがいったん断ったにもかかわらず、新聞でその立候補が報じられたという（http://manilacarnivals.blogspot.jp/2008/08/8-1908-leonarda-limjap-royal.html）。

[30] *Muling Pagsilang*, December 23, 1907（in Maria Kalaw Katigbak, *Legacy: Pura Villanueva Kalaw: Her Times, Life, and Works, 1886-1954*, Filipinas Foundation, 1983, p. 91）.

起因する。

その後、女王コンテストの盛り上がりがアメリカ人社会の外にまで及ぶと、民族間の競争が激化することになった。『マニラ・タイムズ』によれば、12 月 27 日時点で投票総数は 45,608 票、このうち、ベック夫人が 6,647 票、ジョーンズ夫人が 6,635 票で 1 位と 2 位が逆転した。3 位につけたのがスペイン系のバルダサノで、6,006 票とアメリカ人候補にあと一歩まで迫った[31]。ところが、『マニラ・タイムズ』に一日遅れて開票結果を掲載した『ケーブルニューズ・アメリカン』では、総数が 60,000 票あまり、1 位がジョーンズ夫人の 13,815 票、2 位がバルダサノの 11,557 票、3 位がリムハップの 11,290 票で、アメリカ人、スペイン人、フィリピン人を代表するこの 3 人が 4 位のベック夫人（6,671 票）以下を大きく引き離す結果となった[32]。『ケーブルニューズ・アメリカン』によるならば、スペイン人、フィリピン人の猛烈な追い上げにより、アメリカ人の優位はもはや空前の灯火であった。いずれにせよ、一日違いでこれほど違う投票結果が出されたことは、投票の混乱を示唆していた。実際、さまざまな不正が発覚し、1 月 4 日に投票の取り消しが宣言された[33]。

1908 年 1 月 6 日夕方、女王を決定する委員会が開かれた。当日の夕刊は、カーニバルの女王にはバルダサノが選ばれそうだと報じた。スペイン総領事の娘である彼女は、フィリピン人とアメリカ人との競争の間の「幸せな媒介」となるだろうと評された。このほか、東洋の女王はフィリピン人が 1 週間前に候補者として選んだフランシア（Carmen Francia）で、西洋の女王はコルトン（Marjorie Colton）ら 3 人のうちから選ばれるであろうとのことであった[34]。受諾されるまでは公表しないというから、いかに委員会が神経を使っていたかがわかろう。1 月 7 日の『マニラ・タイムズ』は、カーニバルの女王はアメリカ人女性から選ばれ、東洋の女王は議会で決定されると報じた[35]。スペイン人コミュニティは、こうした不透明な選出過程に反発し、同じ時期に独

---

[31] *Manila Times*, December 28, 1907.

[32] *Cablenews American*, December 29, 1907.

[33] *Cablenews American*, January 5, 1908.

[34] *Manila Times*, January 6, 1908.

[35] *Manila Times*, January 7, 1908.

自のカーニバルを開催し、バルダサノを女王に担ぎ上げようと画策を始めた[36]。白人であり、カトリックであり、アメリカがその支配からフィリピン人を救わねばならなかったスペイン人は、「文明化の使命」のナラティブにとって居心地の悪い存在だった。カーニバル協会はスペイン人を排除して、カーニバルをアメリカ人とフィリピン人の融和の物語に仕立て上げることにしたのである。

事前の取りきめでは、新聞・雑誌1部につきクーポンは1枚であったが、アメリカ系の週刊誌はクーポンを4枚もつけた。1月12日に開かれた緊急会議ではこのような週刊誌を擁護する委員がおり、ラングホーンの説得にも関わらず、互いの主張は平行線のまま終わった[37]。窮地に立たされたアメリカ人コミュニティはなりふりかまわない投票活動を展開していた。女性候補者たちは不正な選挙で選ばれることを望まず、辞退者が続出した。14日にフィリピン議会で選ばれたリムハップも、1月末になって辞退を申し出た[38]。17日にカーニバル協会が改組され、委員からスペイン人が排除された[39]。このやり方は批判を招いたが、女王選びを容易にするためのやむを得ない措置だったと思われる。にもかかわらず、女王選びは難航した。

2月半ば、パナイ島イロイロ州の女王に選ばれたビリャヌエバのもとに東洋の女王になってほしいという要請があった。当初、彼女は自分の州を代表したいといって、これを断ったが、数日後に了承した。ビリャヌエバの父はモロのエリートでスペインへ留学の経験があり、同地でスペイン人女性と結婚した。当時17歳のプリータは英語、スペイン語を操り、前年に発足したイロイロ女性協会（Asociación Feminista Ilonga）の会長であった。一方、西洋の女王は、最多得票のジョーンズ夫人が辞退し、コルトンが選ばれた。彼女は本来ならバルダサノがあたるべきカーニバルの女王をも兼ねた[40]。

---

[36] *Manila Times*, January 8, 1908.

[37] *El Adalidad*, January 13, 1908.

[38] *Cablenews American*, January 14, 1908; *El Tiempo*, January 31, 1908（in Maria Kalaw Katigbak, *Legacy*, pp. 103-104）.

[39] *Manila Times*, January 17, 1908.

[40] *El Tiempo*, February 15, 1908（in Maria Kalaw Katigbak, *Legacy*, p. 107）. 女王選びが大きな注目を集めたのに対して、王の選出はほとんど人目を引かなかった。西洋・カーニバルの王にはラングホーン自身が、東洋の王にはマヌエル・ゴメスが選ばれた。選出されたのは、カーニバル

女王選出の一連の過程から垣間見えるのは、植民地における「民主主義」の限界であった。カーニバル協会は選挙というきわめて民主主義的な手段によって女王を選ぼうとした。しかしながら、フィリピン議会選挙と同様に、この女王の選挙でもアメリカ側の意図が裏切られた。アメリカ人候補落選の危機に直面した彼らは、フィリピン議会に選挙権を与えてフィリピン人を納得させる一方、西洋の女王とカーニバルの女王については、投票数を公開することなく密室で決定せざるを得なかった。「民主主義」の教師を自任し、それによってフィリピン支配を正当化していたアメリカであったが、それを実践において示すことはできず、わずかに東洋の女王をフィリピン議会という民主主義の象徴的な場で選出することでお茶を濁さざるをえなかった。擬態としての選挙は「植民地言説のアンビヴァレンスを暴くことによって、その言説の権威をも攪乱」したのである[41]。

予算をめぐる攻防

1908年1月、カーニバル協会はフィリピン議会に対して、5万ペソの補助金を要請した。1月11日付の『アダリード』には、この要請に対する23名のフィリピン人議員の意見が掲載されている。全面的に賛成したのはクラリン（Jose A. Clarin）のみで、彼はカーニバルとは博覧会であり外国の資本を呼び込むチャンスであると考えていた。カーニバルの趣旨に賛成する議員も5万ペソの補助金は多すぎると考えた。そして圧倒的多数の議員はカーニバル自体に反対であり、ほかの有益なことにお金を使うべきであると主張した。たとえば、アンボス・カマリネス州の国民党議員アレホラ（Tomás Arejola）は次のように言う。「私は補助金に反対です。というのも貧困と飢餓に苦しむフィリピンの多くの町が政府の補助をより緊急に必要としているからです。カーニバルは外国の旅行客をひきつけることにしか役に立ちません。それゆえ本当に利益を得るのはいずれにせよ企業とマニラ市でしょう[42]」。アレホラの言葉にはマニラと地方の対立関係がかいま見えている。イロイロの女王ビリャヌエバが東洋の女王になるのを

の直前であり、選出方法などの詳細は不明である。

[41] ホミ・K・バーバ『文化の場所』152頁。

[42] *El Adalid*, January 11, 1908（in Maria Kalaw Katigbak, *Legacy*, pp. 94-96）.

躊躇したのは、イロイロを代表することに誇りを感じていたからであった[43]。彼女が女王に決まったとき、『マニラ・タイムズ』が「コルトンがメトロポリスを代表し、ビリャヌエバが州を代表する」とコメントしたのは、カーニバルに地方をまきこもうという主催者側の強い意図の表れであった[44]。この時点でカーニバルはまだマニラのアメリカ人の祭りであって、米比両民族の融和などというスローガンは全くの虚勢にすぎなかったのである。

1月13日にコレラの流行を理由に、カーニバルの会期が2月初から3月初に変更された[45]。翌14日にはフィリピン議会で東洋の女王を選出する選挙が実施された。議会でミスコンテストをするなど恐らく空前絶後の出来事と思われるが、フィリピン人議員の関心をひいて補助金の支出を認めてもらおうというカーニバル協会、そして植民地政府の苦肉の策であった。17日にカーニバル協会は改組されて法人化し、名誉会長にスミス総督、名誉副会長にフィリピン議会議長のオスメーニャを迎えた[46]。新たに会長に就任したフォーブズはかねてから協会の財政問題の解決に強い関心を寄せており、その影響もあって新協会の会議は「断固としてビジネスライク」に進められた[47]。15,000ペソの補助金の是非を問う24日のフィリピン議会は大荒れで採決が取れず、議長のチャベス（Pedro Chaves）は賛否同数を宣言した。これは規定により案が否決されたことを意味した[48]。このような強引な手法に批判が出たのか、28日に再度採決が実施され、今度は34票対23票の賛成多数で可決した。

予定の金額を得られなかったカーニバル協会は、カーニバル会場内での闘鶏を認可することで、不足する資金を調達しようとした。「フィリピン人の国民的道楽」とされる闘鶏はフィエスタにはつきもので、リサール追悼記念日にもおこなわれていたことは先に見たとおりである[49]。すでに1902年にベル将軍（J. Franklin Bell）が闘鶏を禁止

---

[43] *El Tiempo*, February 15, 1908（in Maria Kalaw Katigbak, *Legacy*, p. 107）.

[44] *Manila Times*, February 17, 1908.

[45] *Manila Times*, January 14, 1908.

[46] *Manila Times*, January 27, 1908.

[47] *Cablenews American*, January 18, 1908.

[48] *Manila Times*, January 24, 1908.

[49] "The Carnival Cockpit," *Cablenews American*, February 19, 1908. デイヴィスは世紀転換期アメリカの新領土における Blood Sport（流血を伴うスポーツ）を題材にして、動物愛護運動とア

していたが、まもなく規制へと方針転換した。これに対して、1906年にブレント主教（Charles H. Brent）らアメリカ人の改革論者が道徳向上連盟を組織して闘鶏反対運動を起こしていた[50]。今回も、プロテスタントの聖職者が闘鶏認可の事実を暴露し、ローズヴェルト大統領に電報で闘鶏を阻止するよう訴えたのを契機として、同連盟のほか、プロテスタント系の政府高官、アメリカ人聖職者、教育関係者、マニラの一部のメディアが反対運動を起こした。闘鶏は野蛮の象徴であり、その「悪徳」は自明のもので、「文明化の使命」によって克服されねばならなかった[51]。

矛盾は明らかであった。スミス総督は弁明を迫られ、市の委員会が決めたと責任を転嫁した。名誉会長のスミス総督はあるいは知らなかったのかもしれないが、少なくともカーニバル協会の実質的運営に携わっていたフォーブズ長官は同意していたはずである。ロハス市長は市がカーニバル協会の要請を承認したことを認めたうえで、闘鶏がどれだけ公正で清潔に運営できるかを示すためだと釈明した。すでに多額の投資がなされており、闘鶏を中止するには投資者への弁済が必要だった。スミス総督、フォーブズ長官は各1,000ペソ、ウッド将軍は100ペソ、反対の急先鋒だった福音主義連盟は1,000ペソを拠出した。アメリカ人高官の態度は曖昧だったが、それでも拠金に応じたのは、闘鶏が「文明化の使命」の理念に反することが明白だったからであろう。しかし、この金額では弁済額に遠く及ばず、闘鶏を阻止することはできなかった[52]。女王コンテストと同じく、ここでも「文明化の使命」の理想は現実の前に後景に退くことを余儀なくされたのである。結局、闘鶏場を訪れたのはほとんどが中国人と「白人」で、闘鶏業者は5,000ペソの赤字を出してしまった[53]。皮肉なことに、文明化されるべきは「白人」のほうであった。「文明化の使命」は二重に破綻したのである。

メリカのネイション建設の結びつきを明らかにした（Janet M. Davis, “Cockfight Nationalism: Blood Sport and the Moral Politics of American Empire and Nation Buildinig,” *American Quarterly*, vol. 65, no. 3, September 2013）。闘鶏をめぐる道徳政治の議論はきわめて興味深い。

[50] Gerald R. Gems, *Sport and the American Occupation of the Philippines*, pp. 89-90.

[51] Warwick Anderson, *Colonial Pathologies*, p. 122.

[52] *El Renacimiento*, February 18, 1908（in Maria Kalaw Katigbak, *Legacy*, pp. 107-108）; *Cablenews American*, February 20, 1908; *Manila Times*, February 23, 1908. 同じころフィリピン議会は闘鶏を制限する議案を検討していた（*Cablenews American*, February 26, 1908）。

[53] “The Carnival That’s Past,” *Cablenews American*, March 5, 1908; *Manila Times*, March 5, 1908. 「白人」としたのは、彼らがスペイン系であることを示唆したかったのかもしれない。

オリンピックゲームズ

1907年12月26日付け『マニラ・タイムズ』はカーニバルの一環として「オリンピックゲームズ」が開催されると報じた。

> 競技場で栄光のために戦うのは、陸軍、海軍、海兵隊、スカウト〔アメリカ人が指揮するフィリピン人軍事組織〕、治安警察隊などの組織であり、みなこの大会をこれまで極東で開かれた最大の競技大会の一つにしようとしている。外国からの代表も栄光を分かつためにやってきて、この2日間、月桂冠をめざして地元の競技者と戦うことになっている[54]。

この記事から、「オリンピックゲームズ」とは実際には軍人による国際競技会であったことがわかる。なぜオリンピックが開かれ、そしてなぜそれは軍人のオリンピックだったのか。

当時のオリンピック――1900年のパリオリンピック、1904年のセントルイスオリンピック、1908年のロンドンオリンピック――はいずれも博覧会の一部として開かれていた。1907年の時点で直近のオリンピックはアメリカのセントルイスで開かれたオリンピックであり、それはルイジアナ買収百周年を記念した大規模な博覧会の一部であった。この博覧会には、フィリピン民政長官（博覧会開催時は陸軍長官）だったタフトの支援により、広大な「フィリピン保留地」が設置され、フィリピンの購入とルイジアナの購入がともにアメリカの「明白なる運命（マニフェスト・デスティニィ）」であることが暗示された[55]。このフィリピン保留地には1,200人にのぼるフィリピン人が「展示」された。そのうち半数以上はフィリピン・スカウトと治安警察で、場内の治安維持を担当すると同時に、アメリカの指導によりフィリピン人がいかに向上しうるかの生きた証となった。一方で、彼らの対極に置かれたイゴロトやネグリトのような野蛮人は、会場を訪れた多くのアメリカ人にフィリピン人が同化不可能であるとの印象を与えた。当時進行中だった大統領選挙戦で、民主党は帝国主義反対の立場から、同化不可能性を根拠に共和党の植

---

[54] *Manila Times*, December 24, 1907.

[55] 1898年12月10日のパリ条約でアメリカはスペインからフィリピンを2,000万ドルで「購入」した。なお「保留地（reservation）」はいうまでもなくネイティヴ・アメリカンの保留地を念頭においたもので、こうした言葉遣いからもアメリカ人が両者を重ねあわせて見ていたことが読み取れよう。

民地政策を批判した。ローズヴェルト大統領はイゴロトやネグリトに服を着せることで批判をかわそうとしたが、さらなる批判を招く結果となった[56]。フィリピン人がアメリカで着せ替え人形にされたことは、主体性の喪失という現実を浮き彫りにすると同時に、その存在が宗主国に及ぼす影響の大きさをも物語っている。

本稿との関係で興味深いのは、「人類学の日（Anthropology Days）」である。これは、白人のオリンピックとは別に企画され、ネイティヴ・アメリカン、フィリピン人、アイヌなど非白人が参加したオリンピックだった。ほとんどなんの準備もなく、嫌々ながら参加させられた彼らの成績が、白人のトップ選手の記録と比べものにならないのは、初めからわかっていたことだった。このオリンピックの企画に関わった人類学者マギー（William J. McGee）が報告書のなかで、「原始人は身体的発展という点でも、精神的発展という点でも、現代の白色人種に比べて著しく劣っている」と述べたように、それは既存の観念、すなわちアメリカを頂点とする帝国主義的＝人種的秩序を再確認する役割を果たしたにすぎなかった[57]。非白人同士で競技させるという発想は、極東オリンピックとも無関係でない。

> 最近、フィリピンの首都で開催された祭典にはたしかに前例があった。1904年にセントルイスで開かれた第3回オリンピックの競技の間、1日か2日がアジア人による演技のために取っておかれた。明らかにアメリカ人は自分たちを極東における競技の指導者と見なしていた。セントルイスの1日がかりの祝祭は、世界のその地域の人々にとって、喜ばしいしろものではまったくなかった。あれほど古く洗練された文明の子孫が、かろうじてその原初の野蛮から抜け出たような人々の代表と競技することを求められたのだ。これは間違いである[58]。国際〔オリンピック〕委員会は……人種をカタログ化することなく世界中に運動競技を普及させようとしている。

---

[56] Robert W. Rydell, *All the World's a Fair: Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916*, The University of Chicago Press, 1984, chap. 6.

[57] Nancy J. Parezo, "A 'Special Olympics': Testing Racial Strength and Endurance at the 1904 Louisiana Purchase Exposition," in Susan Brownell ed, *The 1904 Anthropology Days and Olympic Games: Sport, Race, and American Imperialism*, University of Nebraska Press, 2008.

[58] Pierre de Courbertin, "An Olympiad in the Far East（May 1913）," in Norbert Müller ed., *Olympism: Selected Writings*, International Olympic Committee, 2000, p. 695.

こう語るのは、オリンピックの創始者クーベルタンである。そして彼がここで問題にした祭典こそ、ほかならぬ1913年の極東オリンピックであった。クーベルタンの人種差別主義は彼が批判の対象としたアメリカ人と五十歩百歩であったが、「人類学の日」がオリンピックの国際主義的精神と相容れないこと、その点は極東オリンピックも同じであることを見抜いていた点は慧眼であった[59]。

いずれにせよ、万国博覧会と国際スポーツ競技会には密接な関係があった。一方は産業の国際競争であり、他方は身体能力の国際競争であった。強い経済力と強い軍事力、すなわち富国強兵こそ、弱肉強食の時代を生き抜くために必須のものであり、それゆえ文明化の尺度となり、人種の言説とも不可避的に結びついたのである。

このような博覧会とスポーツ競技会の結合の事例はフィリピンにも存在する。たとえば、南ルソン体育協会が主催した第3回南ルソン競技会はアルバイ州のダラガ基地で1907年4月2日から3日間にわたって開催された。4つの州の学生125名に加え、アメリカ人、フィリピン人の教師および教育関係者、州知事など政府、軍の要人らが出席した。1日目と2日目の晩には舞踏会、3日目の晩には演説大会が開かれた[60]。翌年の大会では、学校の生徒が制作した手工芸品や農業機械等を展示する産業展示会が同時に開かれた[61]。したがって、カーニバルでスポーツ競技会が企画されたこと自体は決して不思議ではないことがわかる（キューバでもハバナカーニバルでYMCAが陸上競技会を組織していた[62]）。むしろ問題はなぜ軍人の競技会だったのかである。

その主たる理由は、ラングホーン大尉が軍隊競技の熱心な提唱者だったことにある。フィリピンの米軍当局は早くからスポーツに熱心で、フィリピン軍政長官をつとめたマッカーサー（Arthur MacArthur）は1902年に一般命令第37号を発布し、フィールド・デーにさまざまな運動競技やゲームをするよう命じた[63]。1903年にミンダナオ軍管区で

---

[59] 極東地域におけるスポーツの主導権をめぐるIOCと極東体育協会の確執もこうした見解の背景にある。この確執は「オリンピック」の名称をめぐる問題に発展する。

[60] “The Southern Luzon Athletic Meet”, *Philippine Education*, vol. 4, no. 2, July, 1907.

[61] “The Bicol Meet,” *Philippine Education*, vol. 5, no. 2, July, 1908.

[62] Gerald R. Gems, *The Athletic Crusade*, p. 90.

[63] 米軍のスポーツについては、拙著『軍隊とスポーツの近代』青弓社、2015年のほか、以下の文献を参照せよ。S. W. Pope, *Patriotic Games: Sporting Traditions in the American Imagination, 1876-1926*, Oxford University Press, 1997; Wanda Ellen Wakefield, *Playing to*

出された一般命令第5号は毎月第2金曜日をフィールド・デーにあてること、運動競技や娯楽遊戯への興味を促進するための訓練プログラムを定め、毎日1時間半を運動競技のトレーニングにあてることを規定した。同年11月にはサンボアンガでミンダナオ軍管区のフィールド競技会が開催された[64]。1906年11月にミンダナオ島で開催されたフィールド・デーには、歩兵第2、15、19連隊、騎兵第4連隊、13大隊が参加した[65]。一方、ルソン島でも同じときに軍管区競技会（Department Meet）が開催され、騎兵第3、7、8連隊、歩兵第9、13連隊、砲兵隊が参加、軍事種目に加えて、野球や陸上競技の試合が組まれた[66]。1907年2月18日から23日までマニラ南郊のパサイ地区で開催された師団競技会（Division Meet）は十数連隊が参加するという大規模なものとなったが、その発案者こそラングホーン大尉だった。彼は十年以上前にコロラドにいたとき、すでにこうした競技のアイデアを持っていた。そしてフィリピン師団長ウッド将軍の副官となったことでようやくこのアイデアを実現できたのである[67]。競技の内容は陸上競技、水泳、ボクシング、レスリング、射撃、銃剣、各種の障害競走、軍事演習などであった。各連隊からはオールスターチームではなく、最良の中隊が送り込まれた。参加したのは各軍管区の競技会に優勝した騎兵第9連隊、歩兵第24連隊、歩兵第25連隊だったが、これらはすべて黒人からなる連隊であった[68]。これは『アーミー・ネイビー・ジャーナル』の記者にとっては由々しきことで、優秀な白人兵士の必要性が叫ばれた[69]。フィリピン人の見ている前で、米軍最強の軍人が黒人であることが示されることは、「文明化の使命」にとってきわめて不都合なことであった。

1908年の師団競技会は1月13日から18日に開かれたが、ちょうどこのときカーニバルの軍隊競技の準備が進められていた。次にその準備の様子を見てみよう。

Win: Sports and the American Military, 1898-1945, State University of New York Press, 1997.

[64] Brian McAllister Linn, *Guardians of Empire: The U. S. Army and the Pacific, 1902-1940*, The University of North Carolina Press, 1997, p. 116.

[65] *Cablenews American*, November 28, 1906.

[66] *Cablenews American*, November 20, 1906.

[67] *Manila Times*, January 14, 1908.

[68] 黒人とフィリピン人との「結合」を恐れたタフトは1902年に「有色」連隊をフィリピンから撤退させたが、人手不足のため1907年にこれらの連隊はフィリピンに戻されていた（Brian McAllister Linn, *Guardian of Empire*, pp. 60-61）。

[69] Harold Seymour, *Baseball: The People's Game*, Oxford University Press, 1990, p. 587.

1907年秋にラングホーンが計画していたのは、競技会ではなく「海軍の展示会」だった。ラングホーンはローズヴェルト大統領にアメリカの軍艦のマニラへの派遣を依頼してほしいとスミス総督に要請した[70]。これは世界一周を計画中だった大西洋艦隊、すなわちグレート・ホワイト・フリート（同年12月16日にバージニア州から出発する）をカーニバルの目玉の一つにしようとの目論見だった。東西の融和とアメリカの軍事力の誇示は矛盾するものではなかった。

スミス総督は10月24日付の書簡でマニラ領事赤塚正助にカーニバルへの協力を要請した。その後ラングホーンから赤塚への書簡では、日本の海軍、陸軍、そして日本人に参加して欲しいこと、とくに大名行列、薩摩踊り、手品師、レスラー、競技者が望ましいこと、展示用の商品には税制面で優遇することなどが述べられている。「競技者（athletes）」とあるが、文脈からして、見世物への出場者であろう。1907年2月に開かれた師団競技会への言及もあるが、この時点ではとくに競技への参加を求めてはいない。赤塚は11月30日付で外務大臣林董に報告した。12月27日になって、ラングホーンは駐日米国大使にライフル競技の案内を送り、香港のイギリス陸軍も参加し、国家対抗の競技にしたいので、日本の参加を政府に働きかけてほしいと依頼した。これこそ本節冒頭で紹介した軍人競技であり、このとき初めて競技会がカーニバルに加わった。日本側では、いったんは海軍の練習艦隊を寄港させることが決まったものの（1月17日付）、1月下旬に陸海軍とも不参加に決まった（1月22、23日付[71]）。ラングホーンは香港のイギリス軍にも呼びかけ[72]、イギリス軍はこれに積極的に応じる準備をしていた。1月中旬にはブロードウッド少将が交渉のためマニラを訪れていた[73]。

先述のように、1月13日に会期の延長が決まったが、このことは別の問題を引き起こした。ウッドとラングホーンは帰国を命じられていたにもかかわらず、カーニバル

---

[70] *El Renacimiento*, September 25, 1907（in Maria Kalaw Katigbak, *Legacy*, pp. 87-88）. 同艦隊は1908年10月にマニラを訪れるが、このとき「土人新聞ハ概シテ沈黙ノ態度」を採っていたなか、「比律賓ノ独立ヲ標榜スル日刊英字新聞『レナシミエント』だけが歓迎を表明したという（JACAR（アジア歴史資料センター）: A04010161600（5-6画像目））。

[71] JACAR: C04014321400. 日本側はカーニバルの開始日を2月9日と受け取ったが、実際にはこの時点で3月9日が予定されていた。

[72] *South China Morning Post*, November 23, 1907

[73] *South China Morning Post*, January 14, 1908.

終了までフィリピンに滞在することを特別に許されていた。そこで滞在の再延長が必要となり、ラングホーンだけが残ることになった[74]。ただし、ラングホーンは実際の軍務から外れたので、軍人競技会の計画を進めることが難しくなった。

マニラの督学官マギー（Charles H. Magee）を委員長とするカーニバルのスポーツ委員会は、フィリピンの少年たちのスポーツ促進のため、フィリピン人のみが参加できる競技と、誰もが参加できるオープン競技にわけて開催することを発表、軍事種目はプログラムから外された。またマニラ高校とアメリカ人との野球の試合が組まれることになったが、これはフィリピン人が「偉大な国技」に対してどれくらい進歩したかをカーニバルの訪問者に見せるためであった[75]。スポーツ競技会に代わった理由は、ラングホーンが軍務から外れたこと以外にも、教育関係者が委員長となったこと、新たにカーニバル協会会長に就任したフォーブズがスポーツの推進者だったことが挙げられる。フォーブズはハーヴァード大学のフットボールコーチを務めた経験があり、当時もポロの現役選手で、マニラ・ポロ・チームのキャプテンであった（副キャプテンはラングホーン大尉[76]）。フィリピン人のスポーツ振興にも熱心で、商務警察大臣だった1905年に各学区で校庭の美化に最も努めた学校に野球道具一式を寄贈したのを手始めに、その後もテニスや野球の用具を同様の形式で寄贈し続けた[77]。

こうして軍人競技会は名実ともに「オリンピック」となった。もっとも、今回は時間の関係で、他の国に参加を呼びかけることはできなかったが、軍人競技会の計画を見てわかるように、本来は国際的な競技会を目指していたのである。国際化は翌年のカーニバルの課題となる。

---

[74] のちラングホーンの滞在延長はカーニバル協会からその費用を支出するという条件で許可された（*Cablenews American*, February 13, 1908）。なおウッドは2月21日に、ラングホーンは3月7日にフィリピンを離れた。

[75] *Manila Times*, January 30, 1908.

[76] *Cablenews American*, November 23, 1906.

[77] “Donation of Baseball Outfits,” *The Philippine Teacher*, vol. 1, no. 2, January 15, 1905; “Award for Tennis Outfits,” *Philippine Education*, vol. 3, no. 1, June, 1906; “A Baseball Outfit for Each School Division,” *Philippine Education*, vol. 6, no. 8, January, 1910.

カーニバル開かる

2月27日夕方、マニラ湾にはアメリカのフィリピン艦隊旗艦レインボーほか3艘の軍艦が停泊していた。「西洋の王」ことラングホーン大尉がランチ後方の玉座から式典の開始を指示し、水上パレードが始まった。海岸にはこの光景を一目見ようと、5万人とも10万人ともいわれる観客が押しかけていた。午後6時、東洋の王を乗せたランチがレガスピ埠頭に到着し、西洋の王を出迎えた。彼は支配者たちの支配者であり、カーニバルの王であり、西洋の王であり、あらゆる対立（rivalry）をお祭り騒ぎ（revelry）に変えることができた。王たちはそろって上陸し、カーニバル委員会のメンバーの歓迎をうけた。騎兵第9連隊、フィリピン・スカウト、治安警察隊が王たちをルネタにある式典会場まで送り届けた。会場には総督、将軍、議長、市長がいて、王たちを迎えた。ロハス市長は王たちに金色の鍵を渡した。この鍵があればカーニバルの期間中、すべての会場に無料で入ることができるはずだった。以上のストーリーが意味するところは明らかだろう。午後9時半から予定されていた仮装舞踏会は雨のために中止となった[78]。

2月28日は午前にフィリピン人の陸上競技会がおこなわれた。高校生を中心に150人がエントリーし、短距離、長距離、跳躍、投擲など8種目の予選が実施された。予選を勝ち抜いた選手31名のうち21名がマニラ高校の生徒であった。昼には野球の試合があり、夕方からは陸上パレードがおこなわれた。このパレードは美しさや規模においてだけでなく、秩序だって時間通り開催された点でも独立記念日やリサール追悼記念日のそれをしのぐものであった。各州の山車のうち、アルバイ州はレガスピのブーツ、セブ州はマゼランの船、とスペイン植民地支配の象徴が取り上げられた。反米感情の現れであろうか。一方、アメリカの企業はリサールの胸像を掲げた。午後8時半からは、競技場で各国のスポーツ、軍隊のデモンストレーション、ダンス、サーカス、コーラスなどさまざまなイベントが実施された。山岳砲兵中隊によるモロ討伐、ズールー戦争、日本軍による旅順陥落などが再現されたが、モロ討伐はもちろんのこと、帝国主義によるズールー王国の植民地化の端緒となったズールー戦争、西洋に対する東洋の勝利でもあった旅順陥落は独立派のフィリピン人を刺激したに違いない。この

[78] *Manila Times*, February 27-28, 1908.

日の出来事を報じた『マニラ・タイムズ』は、アメリカ人とフィリピン人の平和的協力を強調したが、両者の摩擦については記さなかった[79]。この夜おこなわれた舞踏会に東洋の女王は姿を現さなかったのだが、この「事件」についてはのちほど触れることにする。

2月29日は陸上競技のオープン競技会、テニスや野球の試合、山車のパレード、仮面舞踏会がおこなわれた。3月1日の日曜日は「子供の日」で、仮装した子供は入場料が無料になった。午前中の陸上競技会では、100ヤード走で第26歩兵隊のペリーが11秒02（11秒1/2 ？）で優勝した。彼は120ヤードハードル走、220ヤードハードル走も制した。入賞者の多くは米軍兵士であったが、そのなかに混じってフィリピンの高校生が大活躍した。220ヤード走ではガルシアが優勝、1マイルでは同じくマニラ高校のフォナシエが2位、走幅跳でもエリサガが2位に入った。彼らはいずれもマニラ高校の生徒であった[80]。

3月2日はラグビー、テニス、ライフセーヴィングなどがおこなわれ、夜は王の戴冠式につづいて仮装舞踏会が開かれた。翌日、入賞者が発表され、女性の優勝者はクレオパトラに扮したジョーンズ夫人、すなわち女王コンテストで第1位になったあのジョーンズ夫人であった。『マニラ・タイムズ』は、カーニバルの女王ではないけれども、彼女は真の勝利を収めたとして、最大限の賛辞をおくった。最終日の午前はスポーツ競技会が開かれ、午後遅くから王と女王の行進がおこなわれ、午後11時にカーニバルが幕を閉じた[81]。

カーニバルは当初の予想を覆して大成功に終わり、マニラの恒久的制度とすることに決まった。お金を払って入場した人数は5日間で128,000人、13,391ペソの黒字であった[82]。『マニラ・タイムズ』が政府関係者やビジネスマンにインタビューをしたところ、「反対の声は一つとして聞かれなかった」。スミス総督は財政的、社会的側面から成功を喜び、フォーブズは周辺国との商業的絆を強化できたことを評価した。フィリピン人では、

---

[79] *Manila Times*, February 29, 1908.

[80] *Manila Times*, March 1, 1908.

[81] *Manila Times*, March 3, 1908.

[82] *El Renacimiento*, March 4, 1908（in Maria Kalaw Katigbak, *Legacy*, p. 131）; *Cablenews American*, March 5, 1908.

オスメーニャがカーニバルは地方産業を発展させただけでなく、それによって社会関係が改善されたと言い、司法長官アラネタ（Gregorio S. Araneta）はアメリカ人とフィリピン人の感情の調和が促進されたと語った[83]。

アメリカ人の祝祭

東西の融合はカーニバルのメインテーマであり、フィリピン人とアメリカ人の協力・融合はカーニバルの前後を通じて盛んに強調された。しかし、『レナシミエント』紙の主筆カラウ（Teodoro M. Kalaw）が暴露したように、実際には摩擦がたえなかった。

> 東洋と西洋はつねに対立してきた。それはカーニバルの、〔東西の王の〕官僚たちの間でも同じだった。最初の日から、東洋の宮廷がしかるべき礼遇を与えられていないことは明らかであった。西洋〔の宮廷〕が上陸したとき、乗り物が準備されており、彼らはそれに乗ってただちに〔式典会場の〕特別観覧席へ行くことができた。しかし東洋の淑女たちは放っておかれたのである。……もし非常に民主的な資本と労働の息子であるアメリカ人が宮廷のエチケットの儀礼を知らないか、もしくはわからないというのなら、彼らが宮廷冒涜の罪を犯さないようにこの現実の笑劇に参加させないでおこうではないか。東洋の長たちに対するこの侮辱はいかなる法的正当化もできない。このことすべてのために、東洋の女王は気が進まないとの理由により、昨夜の舞踏会に出席しなかったのである。彼女の宮廷のメンバーは辞職した。現地人の個人的品格がそうすることを要求したのである。さらに、東洋の王と女王がカーニバルシティの構内に入ろうとしたとき、門の守衛に引き止められた。彼らは自分たちが王であるといったが、守衛は「たとえ王やキリスト自身であっても、1ペソも払わずに通ることはできない」と答えたのである。なんと厚かましいことか！東洋の王たちは自分の王国に入ることを妨げられたのだ！これは革命なのか、それとも無政府状態なのか？これらの行為すべては直ちに補償されねばならない[84]。

『ムリン・パグシラン』によれば、女王は入場するのに20センタボを支払わねばなら

---

[83] *The Manila Times*, March 4, 1908.

[84] *El Renacimiento*, February 29, 1908.

なかった[85]。カーニバルという仮想世界のフリーパスを与えられたのは、現実の植民地と同じく、アメリカ人だけであった。その理想がどうであったにせよ、カーニバルは完全にアメリカ人のものであった。1934年、ビリャヌエバはインタビューのなかでこう述べている。

> 私にとって、最も楽しかったカーニバルは娘が女王に選ばれたカーニバルです。なぜならそれは正真正銘フィリピン人のものであったということができるからです。私の時代にはもっとカーニバル的な精神があって、仮装も多かったし、通りには多くの人が歩いていたし、トランペットの騒音ももっと大きかった。しかし、その楽しみの期間中、カーニバルを一番楽しみ活用していたのは外国人だったのです。その理由は、それが最初のカーニバルのお祭りだったので、私たち〔フィリピン人〕にはまだよくわからなかったからです。それを組織、運営し、盛り立てたのはアメリカ人だったのです[86]。

ビリャヌエバは1908年のカーニバルのあとしばらくしてカラウと結婚した。2人の間に生まれた娘がマリア・カラウで、1931年のカーニバルで女王に選ばれた。マリア・カラウは母が女王をつとめたカーニバルについて、次のようなコメントを残している。

> 彼女がスターだったカーニバルが、彼女にとって残念なことにも、自分たちの国の人ではなく外国の人によって運営・管理されていたことを率直に言えるようになるのに26年の歳月を要したのである。

もっとも、父のカラウは最終的にはカーニバルを次のように評価した。

> 〔カーニバルという〕アイデアに好奇心を抱いて遠いところから旅してきた何千もの訪問客は、いま仮面、衣装、展覧会、紙吹雪、悪魔、女王、宮廷の紳士淑女、華やかな給仕、堂々とした侍従にまつわる多くの想い出とともにそれぞれの場所に帰っていく。彼らは禁じられたナショナリズムを発見したのだ[87]。

カラウの高揚感は、女王に担ぎ上げられたビリャヌエバが抱いた無力感と対照的であった（彼の高揚感には将来の妻を見初めたことも少しは含まれていただろう。彼はビリャ

---

[85] *Muling Pagsilang*, February 29, 1908（in Maria Kalaw Katigbak, *Legacy*, p. 125）.

[86] Maria Kalaw Katigbak, *Legacy*, p.132.

[87] *El Renacimiento*, March 4, 1908（in Maria Kalaw Katigbak, *Legacy*, p. 130）.

ヌエバの美しさを盛んに賞讃していた)。なぜカラウは態度を変えたのか。たしかにカーニバルの主役はアメリカ人だったが、『ケーブルニューズ・アメリカン』が「結局のところ、カーニバルはほとんどフィリピン人のための見世物だった。彼らはその週のあらゆる式典や催しで圧倒的多数を占めていた」と記したように、観客の多くはフィリピン人であった[88]。たとえば、日本軍政下でカリバピの長官をつとめることになるベニグノ・アキノは当時サン・フアン・レトラン学院の生徒で、夜に寄宿舎を抜け出してカーニバルを楽しんだという[89]。カーニバルはアメリカ人の祝祭であり、フィリピン鎮圧の文化政策の一環であったが、全国各地からやってきた同胞を目にしたカラウはそこにナショナリズムの芽生えと広がりを感じとり、アメリカによる支配の道具であるカーニバルにアメリカに対する抵抗の契機を見出したのである。アメリカに対するカラウの態度が変わったのではないことは、彼がこの年に発表したアメリカ批判の社説が原因となって『レナシミエント』が廃刊に追い込まれたという事実からも明らかである。

その後のカーニバルと東洋オリンピアード

第１回カーニバルが熱狂と興奮のうちに終了した直後から、第２回カーニバルの準備が始まった。不安を抱きながら慌ただしく開催した第１回とは異なり、万全の態勢で臨んだ２回目のカーニバルはあらゆる点で成功を収めた。期間中には「カビテの日」、「ラグナの日」、「モロの日」、「マニラの日」など地方の日を設けて、カーニバルが全フィリピンの祝祭であることが強調された。昨年地方からの出展はラグナ州だけであったが、今年は４州に増えた[90]。これらの展示は審査され、賞が与えられ、州の間にライバル意識が生まれた。それは、カラウが見出したナショナルな意識につながるであろう。

スポーツの大会は東洋オリンピアード（Oriental Olympiad）と銘打ち、陸上競技、クリケット、ポロ、テニスの試合が開かれた。陸上競技ではマラソンが新たに加わっ

---

[88] “The Carnival That’s Past,” *Cablenews American*, March 6, 1908.

[89] ニック・ホアキン著、鈴木静夫訳『アキノ家三代：フィリピン民族主義の系譜』上巻、井村文化事業社、1983 年、104 頁。

[90] *Manila Times*, February 6, 1909.

た[91]。香港駐在の英軍部隊が参加したせいか[92]、競技種目は昨年に比べるとイギリス的で、フィリピン人限定競技も実施されなかった。フィリピンでは、フォーブズが熱中したポロは高級官僚や金持ちのスポーツであり[93]、クリケットもまた欧米人が独占していた[94]。フィリピン人は陸上競技とテニスに出場したが、上位はほとんどアメリカ人、イギリス人によって占められた[95]。最も注目を集めたのは、元南アフリカチャンピオンで在香港英軍のアンドリューと歩兵第25連隊のワシントンが争った440ヤード走で、その模様は翌日の新聞でことこまかに報じられた[96]。一方、フィリピン人に最も人気のあった野球は採用されず、フィリピン人にとっては盛り上がりに欠ける競技会となった。

1910年のカーニバルは前年に総督に就任したフォーブズを委員長に迎えたことで、商業的性格がいっそう強まった。教育局は職業学校の作品展示をおこない、地方の展示品も多くは職業学校の生徒の手によるものだった[97]。あまりにも商業的すぎるとの批判はあったものの[98]、興行的には前回を上回る成功であった。

競技会は昨年に引き続きマニラ高校校長のコルバート（William J. Colbert）が担当した。注目すべきは野球が復活したことで、そのほかサッカー、テニス、陸上競技、クリケット、ポロの試合が実施された。ポロにはフォーブズ総督が選手として参加し、

---

[91] *Manila Times*, February 1, 1909.

[92] 中国の体育史では、たとえば羅時銘『中国体育通史』3巻、人民体育出版社、2008年、314頁のように、1911年に清朝政府がPAAFの招待を受けてカーニバル競技会に陸上競技とサッカーの選手を派遣したという荒唐無稽な説明がなされることがある。おそらく、在香港イギリス人の参加を中国人の参加と取り違えて話を膨らませたのだろう。香港からの競技者がいたことは伍廷芳「遠東運動会攷略」『進歩』8巻3号、1915年6月が触れている。

[93] Tirso Garcia, “Athletics and the Play Movement in the Philippine Public Schools,” *Philippine Education*, vol. 11, no. 6, February, 1914.

[94] カーニバルでは英軍とマニラクリケットクラブの試合がおこなわれたが、フィリピン人は不在だった（*Manila Times*, February 8, 1909）。

[95] フィリピン人の記録は、マニラ高校のガルシアが50ヤード走で4位（*Manila Times*, February 3, 1909）、440ヤードリレーでマニラ高校が2位（*Manila Times*, February 6, 1909）となったのが新聞記事に見えるだけである。

[96] “Washington’s Brilliant Finish,” *Manila Times*, February 4, 1909. この「名勝負」の記録は54秒（1908年の世界記録は48秒1/5）だった。

[97] *Manila Times*, February 11, 1910, second edition.

[98] *Manila Times*, February 15, 1910.

大いに活躍した[99]。またフィリピン学校体育協会（Philippine Interscholastic Athletic Association）の主催で、野球と陸上競技の高校選手権が実施され、セブ高校が両種目を制した。フィリピン人の全国大会を開催すべきだとの声は早くからあった。1908年9月号の『フィリピン教育』には、全国各地で全州競技会、あるいは州対抗競技会が開かれ、多くの成果を上げていることから、全国大会（insular meet）を開催してはどうか、しかも教育局と公教育大臣がこのことに関心を持つべきではないかとの問題提起がなされていた[100]。州対抗競技会に対する公的な支援はなく、教師たちの自発的協力によって運営されていたことを踏まえての提言である。同年2月には第1回カーニバル競技会が開かれていたが、参加したのはマニラ近郊の学校だけであった。それから2年経って、ようやく全国大会が実現した。この大会で陸上競技と野球に活躍したのがイラナン（Regino R. Ylanan）だった。カーニバル競技会はこれ以後、高校選手権とオープン競技会の2本立てで開かれるようになる。オープン競技会では米軍マッキンリー基地のYMCAが強さを発揮した[101]。

1911年1月24日の朝、フィリピン議会の議員たちのもとに、「我々はフィリピン人のものだけを後援すべきであり、あらゆるフィリピン人はアメリカ人によって組織されたカーニバルを後援することを恥ずべきである」という通知が届いた[102]。その後、カーニバルとちょうど同じ時期にフィリピノ・カーニバルを開催する計画が持ち上がり、実行委員会は市政府に公共の場を使用する許可を申請した[103]。市政府は当然のことながらこの申請を却下した。これを受けて抗議集会が開かれ、カーニバルのボイコットが決定された[104]。この運動を率いていたのはポブレーテ（Constancia Poblete）という女性であった。彼女の本業は学校の教師であったが、女性雑誌の編集や女性（平和）連盟の組織に携わるなど女権運動家として活躍していた[105]。カーニバル期間中、『マニラ・

---

[99] *Manila Times*, February 15, 1910.

[100] "Athletic Meets," *Philippine Education*, vol. 5, no. 4, September, 1908.

[101] *Manila Times*, February 15, 1910, second edition.

[102] *Manila Times*, January 24, 1911.

[103] *Manila Times*, February 13, 1911.

[104] *Manila Times*, February 14, 1911.

[105] Georgina Reyes Encanto, *Constructing the Filipina: A History of Women's Magazines（1891-2002）*, The University of the Philippines Press, 2004, p. 36. 父親はリサールの小説『ノリ・メ・

タイムズ』は、アメリカ的遊びに興味を持ちアメリカ的スタイルで喝采をあげるフィリピンの青年たちでカーニバルの会場があふれたとして、ボイコットの試みは全くの無駄に終わったと片付けたが[106]、カーニバルがなお一部のフィリピン人たちに反感をもって見られていたことは注意すべきであろう。ルソン島では依然として反米闘争が続いていたのである。

この年の高校選手権競技会はマギー委員長のもとで開催され[107]、マニラと15州の代表が競技会に参加、カーニバル競技会は名実ともに高校の全国大会となった[108]。イラナンを擁するセブ高校は陸上競技でふたたび選手権を獲得したが、野球はマニラ実業学校に首位の座を譲った。この年から女子のバスケットボールが選手権の種目に加わった。しかし、『マニラ・タイムズ』が今回のカーニバルの最大の目玉の一つはアメリカ人による競技会であると述べたように[109]、少なくとも同紙の読者たちにとって最大の関心はオープン競技会であり、高校選手権はあくまで余興にすぎなかった。

オープン競技会は新たに組織されたフィリピンアマチュア体育連盟（Philippine Amateur Athletic Federation, 略称 PAAF）が主催し、野球、陸上競技、バスケットボール、ボート、サッカー、テニス、ボーリング、水泳、ポロ、綱引き、ゴルフ、クリケット、そしてレスリングが実施された。海外からは例年のごとく香港駐在の英軍部隊が駆けつけ、ポロ、クリケット、テニス、ゴルフに参加した。この年からマニラ YMCA 体育主事ブラウン（Elwood S. Brown）が競技会の運営に当たり、統一ルールの適用、記録の認定・管理制度の導入などによって、お祭り的なイベントから本当の意味での競技会へとカーニバル競技会の面目を一新した[110]。ブラウンの指導もあって今年はマニ

タンヘレ』（スペイン語）のタガログ語翻訳者でフェミニストとして知られるパスクアル・ポブレーテ（Pascual Poblete）で、妹のエスペランサは第1回カーニバルで東洋の女王の女官をつとめた。

[106] *Manila Times*, February 25, 1911.

[107] "Insular News and Personals," *Philippine Education*, vol. 7, no. 8, February, 1911.

[108] *Manila Times*, February 10, 1911.

[109] *Manila Times*, February 18, 1911.

[110] Elwood S. Brown, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1911," in Philippines. Box 5: Administrative Reports. 1910–12, Kautz Family YMCA Archives, University of Minnesota. ミネソタ大学の YMCA 文書については、以下書誌を省略する。中国関係で、陳肅、達格瑪・蓋茨（Dagmar Getz）、大衛・克労森（David Klaassen）整理、趙炬明審校『美国明尼蘇達大学図書

ラ YMCA が圧勝した。

極東オリンピアード（1912 年）

1912 年のカーニバルでは新たに「フィリピンの日」が設けられた。「フィリピンの日」の導入は、おそらく一年前のフィリピノ・カーニバル開催未遂事件を受けたものであり、カーニバルの企画運営にフィリピン人を参画させるための措置であった。そして「フィリピンの日」に加えて「アメリカの日」が設けられたことは、カーニバルがもはやアメリカ人だけの祝祭でないことを端的に示していた。フィリピン人からなる「フィリピンの日」委員会はさっそくカーニバル委員会に要求をつきつけた。それはカーニバルの期間中、半裸の非キリスト教徒原住民および彼らを写した映画の展示をやめてほしいというものだった。それはマニラの「フィリピン人」に羞恥心を抱かせるものであったからである[111]。非キリスト教徒原住民は、アメリカ人にとってはフィリピン人の一部であったが、フィリピン人エリートが想像する同胞からは排除されていた。

本年度のカーニバル競技会は前年に引き続いて PAAF と教育局が主催した。1911 年に刊行された『競技便覧（*Athletic Handbook*）』に基づいて、カーニバル競技会出場者には厳格な資格条件が課せられた[112]。「極東オリンピアード（Far Eastern Olympiad）」と銘打たれた本大会は国際化路線をいっそう推し進めた[113]。ここではその象徴ともいえるテニスと野球を紹介しよう。

前年のカーニバル優勝者、アメリカ人ジー（Edwin S. Gee）の斡旋により、テニス

館蔵基督教男青年会檔案：中国年度報告（1896-1949）：附国際幹事小伝及会所小史』全 20 巻、広西師範大学出版社、2012 年所収のものは、その書誌情報も併記する（以下、『中国年度報告』と略す）。

[111] “Carnaval de Filipinas,” *Renacimiento Filipino*, vol. 2, no. 74, January 14, 1912. 1915 年のパナマ太平洋国際博覧会では、ケソンらフィリピン人が展示を担当したこともあって、セントルイス万博とは対照的に、非キリスト教徒の展示がなされることはなかった。1913 年 10 月にはマニラで衣服を着用せずに外出することが禁止され、翌年 2 月には裸のフィリピン人の写真の撮影、展示、所持が禁じられるなど、フィリピン人イメージ向上に向けた取り組みがなされた（Paul A. Kramer, *The Blood of Government: Race, Empire, the United States, & the Philippines*, The University of North Carolina Press, 2006, pp. 374-375）。

[112] “Rules of Eligibility to be Considered Final,” *Philippine Education*, vol. 8, no. 6, December, 1911.

[113] Elwood S. Brown, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1912.”

の参加者は国際色豊かであった。アメリカから全米9位のガードナー（C. R. Gardner）、日本から朝吹常吉、山崎健之丞、そして3年連続でシングルスの日本選手権を保持していたチャップマン（William J. Chapman）が訪れたのをはじめ、シンガポールのイギリス人、フィリピン在住のアメリカ人、ドイツ人、スペイン人などが参加した。朝吹は三井の元老朝吹英二の息子で、東京ローンテニスクラブの創立者の一人であり、のち日本庭球協会会長をつとめた[114]。東京ローンテニスクラブは1900年に設立され、在留欧米人も多数参加していた。こうした欧米人の国際ネットワークが極東オリンピアードの開催を可能にしたのである[115]。朝吹常吉の娘はこのときの様子を次のように記している。

> 父は大正二（ママ）年、わが国最初のテニス遠征試合をしに、山崎健之丞さん（東京ローン・テニス倶楽部では背が低かったのでショーティという愛称で呼ばれていた）とマニラに行った。社交は大いにやったらしいが、暑さに弱く、試合の成績は全然ダメで一回戦で負けてしまった。しかし、父はそのとき、シングルスに優勝した全米九位のガードナー選手を日本に招いて、硬球プレーを慶應義塾の学生たちに見せ、のちの世界的選手となる熊谷一弥さんが軟式から硬式に変わるきっかけをつくった[116]。

学生テニス界が軟式一色だった当時の日本にあって、東京ローンテニスクラブは硬式のボールを使っていた数少ない集団であった。山崎＝朝吹組はフィリピン人ペア、スアレス＝ファルガス組に1-6、6-4、2-6で敗れた[117]。シングルスではガードナーが優勝し、ダブルスではファニング（Paul Fanning）＝ジー組が優勝した。

野球は1月10日にアメリカ大使館経由で早大か慶大のいずれかを招待したいので、

---

[114] 三井物産はマニラに支店を持っていた。支店長は三神敬長で弟の八四郎は早大時代からテニスの選手として活躍、1917年にマニラで開かれた東洋選手権に熊谷一彌とともに出場し、同年の極東大会には選手として、1919年の極東大会には監督として参加したが、同年末にダバオで急死した。

[115] クリケットの場合、早くも1866年から毎年香港・上海の対抗戦が実施されていた。

[116] 朝吹登水子『私の軽井沢物語―霧の中の時を求めて』文化出版局、1985年、139-142頁。朝吹常吉自身も当時のことを語っているが、誤りも少なくない（朝吹磯子『回想朝吹常吉』朝吹磯子、1969年、47-48頁）。

[117] *Manila Times*, February 9, 1912.

旅費 1,000 円を出すから 21 日の満洲丸で出発して欲しいとの要請がなされた。ちょうど慶大野球部は 4 月から 5 月にかけてマニラの全陸軍チームを招待する予定だったが、このときは試験前だったのでマニラ行きを断念、早大が要請に応じた[118]。早大野球部は 1905 年にアメリカ、1910 年にハワイ、1911 年にアメリカと 3 回の海外遠征を経験していた。このように野球の世界ではすでに国際交流が盛んであり、早大のマニラ遠征もそのネットワークのなかに位置づけることができよう。河野安通志教授率いる早大野球部は予定通り 21 日に出発、31 日にマニラに到着すると、在留邦人の盛大な歓迎をうけ、領事館や三井支店等に分宿した。試合の結果は 2 勝 3 敗と振るわなかったが、その原因は「倔強なる選手二名家事の都合により参加せざりしと出発前練習の足らざりしと且選手一同は熱帯の気候のため健康を害したる為」であった[119]。またフィリピンで一般的な 7 回制にも対応できなかったようだ。早稲田 3 敗の相手はマニラ YMCA、陸軍、そしてセブ高校であった。バクライ＝イラナンのバッテリーを擁するセブ高校は、高校選手権ではなく極東選手権（Far Eastern Championship）で戦うことを教育局長からとくに許可されていた[120]。

ブラウンはフィリピン人学生が野球でみせた自己規制と礼儀正しさに賛辞を送る一方、賭博の現象が見られたことについて、クリーンなスポーツを目指さなければ、闘鶏のようになってしまうと警鐘を鳴らした[121]。スポーツが「文明化の使命」の役割を果たすには、アマチュア主義が厳格に履行される必要があった[122]。さきに、ブレント主教らが組織した道徳向上連盟が闘鶏に反対したことに触れたが、ブレントは 1914 年にフォーブズの後任として PAAF 会長となる。この事実はフィリピンにおけるアマチュア主義と「文明化の使命」の強い結びつき、そしてそのキリスト教的（より厳密にはプロテスタント的）性格を示唆している。

---

[118]『読売新聞』1912 年 1 月 16 日。

[119]『東京朝日新聞』1912 年 2 月 19 日。

[120] “Athletics,” *Philippine Education*, vol. 8, no. 8, February, 1912.

[121] E. Brown, “Interscholastic Sports, Philippine Carnival, 1912,” *Philippine Education*, vol. 8, no. 9, March, 1912.

[122] Stefan Huebner, *Pan-Asian Sports and the Emergence of Modern Asia*, p. 8.

第2章　極東オリンピックの開催

極東オリンピックのアイデア

1909年秋、天津YMCA総主事ロバートソンがソルトレイクシティを訪れ、同市YMCA体育主事ブラウンに会った。休暇で一時帰国中のロバートソンは海外事業資金獲得のために中西部から太平洋岸をめぐる旅行の途次にあった[123]。1950年代にロバートソンはある研究者への手紙で、このとき2人は極東でオリンピックを開くという考えについて話しあったと証言した[124]。天津YMCAは1895年の設立当初から体育事業に力を入れており、スポーツマンであったロバートソンも中国人選手をオリンピックに参加させるべく、講演会や映写会などを通じたキャンペーンをおこなっていた[125]。そんな彼がフィリピン赴任を控えたブラウンと極東オリンピックの開催について話し合ったのは当然の成り行きであった。

ブラウンは1910年1月にフィリピンへむけて出発、赴任後最初の事業報告のなかで、1911年のカーニバル競技会の成果を述べたあと、極東のオリンピック大会も夢ではないと語っている[126]。1913-1914年度の報告書では極東オリンピックのアイデアは1912年のカーニバル競技会における日本対フィリピンの野球の試合から生まれたと記し[127]、以後もこの見解を繰り返すが、実際にはブラウンは早くから極東オリンピックの構想を持ち、カーニバル競技会に重ね合わせていたのである。

とはいえ、極東オリンピックを構想していたのは極東のYMCA関係者だけではなかった。前章で見たように、すでにカーニバルは創設当初からオリンピックを企画していた。例年、カーニバル競技会には海外からの参加者があり、1909年には「東洋オリンピアー

---

[123] Clarence H. Robertson, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1909,”（『中国年度報告』3巻、505頁）。

[124] Wu Chih-kang, “The Influence of the YMCA on the Development of Physical Education in China,” *Ph. D. dissertation*, University of Michigan, 1965, p. 130.

[125] Clarence H. Robertson, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1909,”（『中国年度報告』3巻、499-500、503-504頁）。

[126] Elwood S. Brown, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1911.”

[127] Elwood S. Brown, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1914.” 具体的には早大とセブ高校の試合を指す。

ド」が開催されていた。しかし、それはオリンピックの地域版を開催して極東の競技レベルを向上させるというよりは、お祭りを盛り上げるためのイベントとしての性格が強かった。ブラウンの独創性は、そこにYMCA的な要素（ヒュブナーの言葉によれば、キリスト教的国際主義、キリスト教的平等主義、「プロテスタント的職業倫理」[128]）とYMCAの国際ネットワークを持ち込んだことであろう。アマチュア主義の厳格な施行は国際オリンピック大会との接続を可能にした。

1912年のカーニバルの期間、中国YMCA体育主事のクロッカー（John H. Crocker）がマニラに来ていた。おそらく極東オリンピックの準備を念頭にブラウンが呼び寄せたのだろう。実際、クロッカーは極東オリンピックにさいして中国代表チーム編成の責を負うことになる。カーニバルの期間中に極東オリンピックの計画が具体的に話し合われたことは次の資料からも明らかである。

> 今回の行は日米親交を益親密ならしめ、且当地運動会に良好なる印象を与へ、現に今日は陸海軍倶楽部に於て午餐会を催し、提督よりは代理を出し、将来毎年運動奨励の為、東洋のオリンピック大会を催し、日本を始め各国より選手を出し、大いに競技せしめんとて打合せを為し、不日具体的成案を見るべく、又今春は当地より日本人と野球仕合の為、陸海軍人団を派遣し、秋期にはテニス団体を出さん計画ありと[129]。

計画が実際に動き始めるのはストックホルムオリンピックが終了して1か月ほど経った8月下旬である。マニラの領事代理から「東洋オリムピツク」を計画しているとの知らせが日本に送られてきた[130]。中国にも同じ通知が送られたはずだが、資料は残っていない。その後すぐにブラウンが上海と東京に赴き、大会への参加を要請した。東京での交渉の内容を最も詳しく報じたのは、東京の新聞ではなく『大阪毎日新聞』だった[131]。同紙にはブラウンが提示した極東オリンピック協会の規約書草案の全文が掲載されている。この草案によれば、協会設立の目的は「運動精神の鼓吹、競技の研究発達、及び小にしてはこの地域における運動レコード作製を期し、尚お進むで世界的模範素

---

[128] Stefan Huebner, *Pan-Asian Sports and the Emergence of Modern Asia*, p. 6.
[129]『東京朝日新聞』1912年2月10日。
[130]大日本体育協会編『第十回極東大会報告書』2頁。
[131]『大阪毎日新聞』1912年9月30日。

人運動家の養成を計る事」であった。ブラウン自身の言葉によると、その意義は次のような点にあった。

> この領域は約6億、つまり世界全体の40%の人口を擁している。十数か所を除いて、この厖大な領域と人々は、競技の基準もなければ、組織もなく、活動もないのである。……それは国際オリンピック競技において代表の地位を有したことがなく、わずかに2人の参加者を送ったにすぎない。この組織〔極東オリンピック協会〕は国際オリンピック委員会によってアクセスすることが困難でこれまで開拓されてこなかった領域をカバーするために作られたものであり、その目的は同委員会の仕事と対立することではなく補完することにある[132]。

ブラウンは極東オリンピックをオリンピックの延長、あるいはその裾野を広げるものと位置づけていた。にもかかわらず、極東オリンピックにはオリンピックと大きく異なる点があった。参加の単位と競技の種類である。

まず参加の単位について論じよう。シンガポールの『海峡タイムズ』によれば、上海の交渉で提示された参加単位は、北中国、南中国、中国国境以南の大陸部、日本列島、フィリピン列島であった[133]。それぞれの地区の中心都市、すなわち上海、香港、シンガポール、東京、マニラはこれまでカーニバル競技会に選手を派遣したことがあり、またそれぞれ航路で結ばれ、マニラから南北に伸びるYMCAの国際ネットワークに連なっていた。その後、東京で提示された参加単位は、「上海を中心とする北支那、香港を中心とする南支那、日本及其領域、比律賓群島、新嘉坡を中心とする馬来半島及び暹羅」だった。シャムが追加されたのは、シンガポールからその参加の可能性が伝えられたからかもしれない[134]。ブラウンが国家ではなく地区を参加単位としたのは、国際主義的思考（スポーツは「世界」をキリスト教化する手段であって、国家や民族のような概念は重要ではなかった）の持ち主であったことに加えて、選手の選抜と派遣を担当で

---

[132] Elwood S. Brown, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1912.”

[133] *The Strait Times*, September 5, 1912は、「North China, South China, the main land south of the China boarder, the Japanese Islands, the Philippine Islands」の5地区とする。なおこの記事では交渉者はトゥサリーとなっている。トゥサリーが上海までブラウンに同行したことを示す資料は他にない。

[134] シンガポールとシャムには規約を送付して参加を要請した。ブラウンは1914年に両地を訪れて勧誘するが、結局参加は実現しなかった。

きるような組織（具体的には比較的大規模な YMCA 組織）の所在をまず考慮したからであろう。ただし、YMCA 組織のなかったシンガポールは 1934 年に極東大会が解散するまで一度も選手を派遣できなかった。

これはたとえば中国 YMCA が 1910 年に全国運動会を開いたときに採用した方法でもあった[135]。しかし、国際競技会となると、地区の持つ意味は変わってくる[136]。ブラウンの提案はほかならぬ中国 YMCA から強い反発を受けた。なぜなら中国は 2 つの地区に分断され、別々のチームとして参加することになっていたからである。

> 始め(ママ)ブラオン氏の計画した所によると、この大会出場選手は規約にもある通り、地方別となし人種別となさない積りであつた様だが、其後支那協会側の主張によれば支那は飽くまで支那を代表したる支那人を以てすべく、上海、香港在住の外人は各其国籍に従ひ、大会は宜敷く国際的性質を帯ばしむるを至当とすといふので、案外強硬な態度を示したので、大会も目下これについて研究中である[137]。

植民地政府と深い関係を持ち、支配者としての立場から活動を展開していたフィリピン YMCA とは違い、中国 YMCA は影響拡大のために中国のナショナリズムと折り合う必要があった。スポーツ事業も例外ではなかった。体育主事エクスナーによれば、全国運動会の第一の成果は、中国人が中国改善のための実践運動をキリスト教および YMCA と同一視するに至ったことであった。そして全国各地から選手が集うことで、地域感情が解体され、国民精神が成長したと述べている[138]。このような中国 YMCA にとって、中国を分断するような提案は受け入れがたかった[139]。中国 YMCA の強硬な態度を紹介した日本の新聞も、「この主張通りになれば純国際的の競争を見るに至るべく、

---

[135] このとき最も関心を引いたのは、地区対抗ではなく、学校対抗だった（Max J. Exner, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1910,”（『中国年度報告』4 巻 158 頁））。

[136] ただし、第一次世界大戦以前はスポーツとナショナリズムの結びつきは一般にまだそれほど強いものではなかった。アルノーによれば、両者が結びついた最初の主要なスポーツ大会はストックホルムオリンピックだった（Pierre Arnaud, “Sport and International Relations before 1918,” in Pierre Arnaud and James Riordan eds., *Sport and International Politics*, Spon Press, 2001）。

[137]『大阪毎日新聞』1912 年 12 月 29 日。

[138] Max J. Exner, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1910,”（『中国年度報告』4 巻、160 頁）。

[139] 1913 年に極東オリンピック協会会長に選ばれる伍廷芳は、1911 年末の南北講和会議で南方側の代表として参加し、中国の分裂を回避することに貢献した人物である。

漫然地方別にするよりは興味は一層多いといふものだ」と、中国側の意見に同調した。結局、中国側の提案が通って、国別対抗の選手権大会という形式が取られることになった。それがブラウンの本意でなかったことは、以上の経緯から明らかであろう。ブラウンはのちに極東体育協会の規約で、「代表の国々は政治的境界によって範囲が定められている。これらの境界はいつなんどきでも、より明確に定められることもあれば、変更されることもありうる」と「国（country）」の定義に柔軟性を付与したが[140]、ここにはナショナリズムへの反発が隠されているのかもしれない。

ブラウンは極東オリンピックの開催を加盟国の間で持ち回りすることを考えていた（彼が提示した順番は交渉相手によって異なっていた[141]）。この点は、従来のカーニバル競技会で開かれていた極東選手権との最大の相違点である。このアイデアはブラウンの独創というよりオリンピックから得たというべきだろうが、それによって極東オリンピックは（将来的に）フィリピンの文脈を離れ、平等主義的、国際主義的な「地域」秩序を体現することが可能となった[142]（このことはオープン競技会の重要性を低下させた）。そして第二回大会以降は、カーニバル競技会が極東大会の下位に位置づけられ、その予選会となった。こうして、オープン競技会を頂点としたフィリピン国内の競技会の体系が再編されることになる。

フィリピンにおけるスポーツの普及

極東オリンピックの第二の特徴は競技の種類である。具体的には、陸上競技、水泳、自転車、テニス、野球、バスケットボール、バレーボール、サッカーだが、このうち野球、バスケットボール、バレーボールは当時のオリンピックに採用されていなかった。なぜこのようなラインナップになったのだろうか。その問題を考える手掛かりとして、当時フィリピンでそれらの競技がどのような状態にあったかを確認しておこう。

---

[140] William Tutherly, “The World at Play: A Program of Practical Athletics for the Millions”, 1920, in Kautz Family YMCA Archives, University of Minnesota, part 1, exhibit 1.

[141] たとえば『大阪毎日新聞』1912 年 9 月 30 日では第 2 回が東京で開催となっているのに対して、*The Singapore Free Press and Mercantile Advertiser*, October 9, 1912 では第 2 回が香港、その次がシンガポールか上海となっている。

[142] Stefan Huebner, *Pan-Asian Sports and the Emergence of Modern Asia*, pp. 26-30.

1898年5月から11月にかけてアジア方面戦隊司令官デューイ（George Dewey）の旗艦オリンピア号の船員は野球の公式戦を5回おこなったが、リーブズによればこれはフィリピンにおける最初の公式戦であった[143]。エース投手であるチャーチ（Ernest "Pop" Church）はかつて横浜で一高相手に辛勝した試合で活躍した投手でもある。米軍兵士は至る所でグラウンドをこしらえ、野球を楽しんだ。彼らはフィリピン人にも熱心に野球を教えた。ベル少将によれば、野球は他のなににもましてフィリピン人を文明化するのに役立ったのである[144]。

1902年にパコ野球場が完成し、すでに始まっていた米軍のマニラ野球リーグの会場となった。公立学校間の野球試合は1903-1904年度にマニラの学校で始まり、1905年にはリーグが結成された。宣教師ダンラップ（George W. Dunlap）と元大リーガーのポンド（Arlington Pond）はセブ高校で野球のコーチをし、そのもとでセブ高校野球部は黄金時代を迎え、1910年から1915年の間に4回選手権を獲得した[145]。フィリピン人教師自身もまた強い野球チームを作りあげた。野球好きのサン・マテオ高校校長は1909年に野球チームをつくり、2年半かけてチームをカーニバル競技会出場に導いた[146]。

1910年にフォーブズが野球用具の寄贈を申し出た際、その獲得のために482チームが1,201試合を戦ったということから、野球の普及具合を知ることができよう[147]。実際、野球はフィリピンの隅々にまで行き渡っていた。レベルの向上も目覚ましいものがあった。1911年にシカゴ大学の野球チームがマニラを訪れたとき、フィリピン人チームはこれを破った。1912年にはマニラ野球リーグに初のフィリピン人プロチーム、オール・フィリピノが加入した。当時、野球はフィリピン人に最も人気のあるスポーツであった。

---

[143] Joseph A. Reaves, *Taking in a Game: A History of Baseball in Asia*, University of Nebraska Press, 2002, p. 91. 以下、フィリピンの野球の歴史については概ね同書に基づいた。

[144] Harold Seymour, *Baseball*, p. 324.

[145] Gerald R. Gems, *Sport and the American Occupation of the Philippines*, p148. ただし1911年はマニラ実業学校に譲り、1914年はカーニバルが開催されなかった。

[146] Luis Santiago, "The Organization of the San Mateo Baseball Team," in Geronima T. Pecson and Maria Racelis eds., *Tales of the American Teachers in the Philippines*, Carmelo & Bauermann, Inc., 1959, pp. 195-199.

[147] Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, s.n. c1965, p. 61.

野球についで公立学校で盛んになったのが陸上競技である。1904年に野球リーグとして組織された南ルソン競技協会は、1906年の競技会から陸上競技を採用し、アルバイ、ソルソゴン、マスバテ州の州立学校が参加した[148]。先述のとおり、1908年のカーニバルにさいしてフィリピン人の陸上競技会が開かれたが、参加したのはマニラ近郊の学校に限られていた。このとき活躍したマニラ高校では前年に陸上競技チームが結成されたばかりだった[149]。1910年のカーニバルからフィリピン学校体育協会の主催で陸上競技の全国選手権が開かれようになる。南ルソン競技会のような地区の大会で優秀な成績を収めた選手がこの全国選手権に参加できた。PAAFとの共催で開かれた1913年の全国選手権では、カガヤン渓谷グループ、イロカノ競技協会（1910年設立）、中央ルソン競技協会（1907年設立）、マニラ学校競技協会（1909年設立）、南ルソン競技協会、ビサヤ学校協会の開催する競技会が地区予選として認められた[150]。フィリピン人をコーチしたのは、陸上競技経験のあるアメリカ人教師であった。たとえば、セブ高校のヒンマン（L. D. Hinman）は1911年と1912年のカーニバル競技会で1マイル走に優勝するなど、現役の選手としても活躍していた[151]。セブ高校はヒンマンの指導もあって、1910年から1915年まで高校選手権5連覇を果たした（競技会がなかった1914年を除く）。

フィリピンで最初のプールはリサール州のマッキンリーYMCAに作られた。北米YMCA軍事奉仕部門の元スタッフのストック（George E. Stock）はここでフィリピノオリンピック水泳チームを組織した。1910年にはマニラYMCAに、1911年にはコロンビアクラブにそれぞれプールが作られた。YMCAは水泳を重視し、世界各地にプールを備えたYMCA会館を建設していた[152]。1911年のカーニバル競技会は完成したばか

---

[148] "Southern Luzon Athletic Meet," *Philippine Education*, vol. 3, no. 1, June, 1906; Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, pp. 102, 124.

[149] "The Track Team," *Philippine Education*, vol. 7, no. 4, October, 1910.

[150] "Carnival Athletic Meet for 1913," *Philippine Education*, vol. 9, no. 6, December, 1912.

[151] Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, p. 102.

[152] Elmer L. Johnson, *The History of YMCA Physical Education*, Association Press, 1979, pp. 130-136.

りのコロンビアクラブのプールでおこなわれ、マニラ YMCA、コロンビアクラブ、そしてアジア艦隊サラトガ号チームが参加、マニラ YMCA が優勝した。翌年のカーニバル競技会ではベニテス（Conrado Benitez）が活躍し、競泳史に名を残した最初のフィリピン人となった[153]。彼はこの年政府派遣の留学生としてシカゴ大学に入り、ウォーターポロチームの主将に選ばれた。しかし、1914 年にある学校関係者が「どうしてフィリピンでは水上競技にしかるべき注意が払われないのだろうか。当局は真剣に水泳の導入の妥当性を考慮すべきである」との意見を出したように、水泳はさほど重視されていなかった[154]。プールの不足はその主たる原因の一つだろう。

テニスは最初アメリカ人の独占物であった。マニラローンテニスクラブは 1902 年にはすでに活動を始めていた。1906 年、フォーブズは公立学校にテニスの道具を寄贈しテニスの普及につとめた[155]。1907 年 12 月にアメリカ留学から帰国したフィリピン人学生によって設立されたフィリピンコロンビア協会のメンバーたちもテニスを楽しんだ（いまでも PCA 杯がある）。その創設会員にはブエンカミノ（Victor Buencamino）やシソン（Antonio G. Sison）ら、のちに極東体育協会の解散に関与する人物が含まれている。フィリピン人のクラブは 1908 年に創設されたラオンラアンテニスクラブが最も早い[156]。1909 年のカーニバル競技会ではフィリピンスポーツ連盟（Liga Sportiva Filipina）会長トリェスが率いるフィリピン人チームが参加した[157]。

バスケットボールは YMCA が中心となって普及した。いつからバスケットボールが始まったかは定かではないが、1909 年の夏にはパンガシナン州で同州最初のバスケットボールの試合がおこなわれている。省立学校教師ブラックマン（Roy B. Blackman）は秋から始まる新年度にこの競技を全州に広めたいとの抱負を語った[158]。1910 年までに

---

[153] Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, p. 84.

[154] "Athletics," *Philippine Education*, vol. 11, no. 4, October, 1914.

[155] "Award of Tennis Outfits," *Philippine Education*, vol. 3, no. 1, June, 1906.

[156] Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, p. 93.

[157] *Manila Times*, February 1, 1909, second edition.

[158] Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, p. 70; "Ginatilan Note," *Philippine Education*, vol. 6, no. 2, July, 1909.

マニラ YMCA とマッキンリー YMCA がリーグ戦を始めており、1911 年のカーニバル競技会ではコロンビアクラブを交えて全国選手権が実施された。このとき最初の選手権を獲得したマニラ YMCA は以後長期にわたって選手権を独占した。公立学校でもバスケットボールはおこなわれていたが、野球や陸上競技ほどの人気はなかった[159]。1910 年秋にセブ高校とボホル高校がバスケットボールの試合をしたが、「双方ともまだ日が浅いのであまりいいゲームではなかった[160]」。1910 年初頭に教育局次長クローン（Frank L. Crone）が「公立学校が設立されたところでは、野球、陸上競技、テニス、バスケットボールがコミュニティ生活で重要な地位を占めるようになる」と述べたものの[161]、バスケットボールが本格的に普及するのは 1920 年代以降のことである。

バレーボールをフィリピンに伝えたのは YMCA のブラウンであった。ブラウンは 1911 年夏にバギオで政府職員にバレーボールを紹介した。のちに彼が組織した官庁体育協会ではバレーボール、バスケットボール、陸上競技、水泳が実施されていた。PAAF は 1912 年にバレーボールを全国選手権の公式種目とした[162]。当時のバレーボール公式戦は 1 チーム 16 人で編成された。YMCA がバレーボールリーグを創設した 1914 年にフィリピン全体で 5,000 以上のコートがあった。「フィリピノ爆弾」すなわちスパイクや 3 打以内で相手に撃ちかえすルールはここフィリピンで発明された[163]。

サッカーは米西戦争の 3 年前にマニラのイギリス人によってフィリピン人に紹介され、また香港やシンガポールから戻った留学生もその普及に一役買った。1906 年設立のサンドウ運動クラブはサッカー、陸上競技、ボクシングで有名だった。1907 年にはフィリピン議会開催にあわせてサッカーの最初の公式大会がおこなわれサンドウが優勝した。1908 年にはサッカーリーグが組織された。有名なクラブとしてボヘミアスポーツクラブやノマドがあった。サッカーは学校ではあまりおこなわれず、社会人のクラブチームが中心だった。高校選手権でサッカーが実施されるのは 1940 年になってからで

---

[159] Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, p. 70.

[160] "Bohol Beats Cebu," *Philippine Education*, vol. 7, no. 6, December, 1910.

[161] Frank L. Crone, "School Athletics," *Philippine Education*, vol. 6, no. 8, January, 1910.

[162] Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, p. 110.

[163] Byron Shewman, *Volleyball Centennial: The First 100 Years*, Masters Press, 1995, p. 8.

あった[164]。

極東オリンピックで採用された競技のうち、水泳、バスケットボール、バレーボールはYMCAがとりわけ重視する競技だった。このうちバレーボールの採用は、ブラウンが極東オリンピックへの参加を呼びかけた地域におけるスポーツの現状をほとんど考慮していなかったことを示唆している（日本でも中国でもバレーボールの本格的紹介は極東オリンピックののちである）。陸上競技はオリンピックの花形競技であった。もっとも、オリンピックの華と言われるマラソンはフィリピンではほとんど実施されていなかった。それどころか、長距離走は少年にとって有害であると考えられ、1912年のカーニバル競技会の種目から外されていた[165]。マラソン（5マイル）が極東オリンピックの種目に採用されたのは、ストックホルムオリンピックの影響だろうか（日本はマラソン選手を派遣していた）、もしくは日本側が強く要請したのであろう。野球とテニスは1912年のカーニバル競技会の実績があった。自転車については不明な点が多いが、国際オリンピックでもこれまでのカーニバル競技会でも採用されていた[166]。

国際オリンピックやカーニバル競技会と比べたとき、顕著な違いは女性の不在である。当時、女子学生の間で盛んだったのはバスケットボールとインドア野球だった。バスケットボールは通説では1910年にアメリカ人教師が教えたのが最初とされるが、1906年にカピス州立学校の校内運動会で女子学生によるバスケットボールの試合がおこなわれた記録がある[167]。1911年のカーニバル競技会には5チームが出場し、トンド中学が優勝した。後にイラナン夫人となるカルメンはトンドチームのキャプテンであった[168]。

インドア野球は野球を室内でできるように修正したもので、フィリピンに紹介され

---

[164] Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, pp. 76-78.

[165] "Important Bureau Circulars," *Philippine Education*, vol. 8, no. 6, December, 1911.

[166] 極東オリンピックで優勝したカレオンは、1911年のリサール追悼記念日に開かれた自転車競技の優勝者で、『レナシミエント・フィリピノ』はその写真を掲載している（*Renacimiento Filipino*, vol. 2, no. 74, January 14, 1912）。

[167] "Items from Capiz," *Philippine Education*, vol. 3, no. 2, July, 1906.

[168] ただし、女子バスケットボール選手権は1913年が最後となった。

たのは1912年とされる[169]。ただし、ブラウンはのちのインタビューで初めてマニラに来たとき、スーツケースの中にバレーボールとインドア野球用ボールを入れていたと語っており、導入の時期はもう少し早かったかもしれない[170]。「インドア」といっても、フィリピンではつねに野外でおこなわれ、女子のスポーツとして急速に普及した。そして1913年のカーニバル競技会で女子インドア野球が初めて採用された。ストックホルムオリンピックでも水泳とテニスに女性が参加していた。これに対して、ブラウンは極東オリンピックを構想するさいに、当初から女子競技については念頭になかったようである。各国の女子スポーツの普及状況から実施は困難と判断したのだろうか（ブラウンは1915年の極東大会にさいして、女子スポーツ普及を目的に女子インドア野球チームを中国に連れて行った）。

フィリピン代表が何人いたのかはよくわからない。1月28日に代表候補者の名簿が公開されたときには、陸上競技82人、水泳22人、野球20人、バスケットボール18人、自転車12人、サッカー13人、テニス4人、バレーボール17人であった[171]。単純に合計すると186人だが、複数の競技に出場するものも20人近くいる（姓しかわからないものも多く断定はできない）。陸上競技はオリンピックとほぼ並行して実施された学校選手権で二次選抜がおこなわれたようである。野球は『マニラ・タイムズ』に、セブ高校、フィリピン大学、メラルコ（社会人チーム）などから選抜されるだろうとの記事がある[172]。バレーボールは、2月1日から4日にかけて開催されたトーナメント戦の優勝チームが選ばれることになった。コロンビアクラブ、マニラYMCA、教育局など5チームが参加し、マニラYMCAが優勝した[173]。『ファー・イースト』は陸上競技に62人（うち44人が公立学校、7人が大学）、野球に15人（うち8人が公立学校、3人が大学）、サッカーに13人（学生なし）とする[174]。

表1は、さまざまな資料に見える選手の名を整理したものである。1月28日に発表

---

[169] Tirso Garcia, “Athletics and the Play Movement in the Philippine Public Schools.”

[170] “Meeting of the War Historical Bureau of the Young Men’s Christian Association,” January 5, 1920, in Kautz Family YMCA Archives, University of Minnesota.

[171] *Cablenews American*, January 28, 1913.

[172] *Manila Times*, January 31, 1913.

[173] *Cablenews American*, February 1, 1913; *Cablenews American*, February 6, 1913.

[174] E. S. Yule, “The Great Far East Olympiad,” *The Far East*, March 1, 1913.

表１　フィリピン代表名簿

*	競技	姓	名	資料１	資料２	資料３	資料４	資料５	備考
	baseball	Abas		○				○	アーバス、アバース（資料5）
	baseball	Baclay	Hipolito	○		○		○	バクライ（資料5）
*	baseball	Bernales	Juan			○			
*	baseball	Cesar	Felix			○			
	baseball	Domingo		○				○	ドミンゴ（資料5）
*	baseball	Enriquez	Lorenzo			○			
*	baseball	Espina	Filomeno			○			
	baseball	Estacio		○				○	エスタシオ（資料5）
	baseball	Fargas	Gil	○				○	プァーオス、フワーガス（資料5）
	baseball	Florentino							*Philippines Free Press*, February 8, 1913.
*	baseball	Garcia	Cornelio			○			
*	baseball	Jaranang	George			○			
	baseball	Manuel	Ramon	○		○		○	マーエル（資料5）
	baseball	Mendoza		○				○	メンドザ（資料5）
	baseball	Ora						○	オラー（資料5）
*	baseball	Pangilinan	Cristino			○			
	baseball	Pargas						○	パルガス、パーガス（資料5）
*	baseball	Regis	Cristito			○			
*	baseball	Santiago	Bernardino			○			
	baseball	Suarez	Leandro	○				○	サオレック、スハレッズ（資料5）
	baseball	Torralba	Margarito S.					○	トラルバ（資料5）
	baseball	Ylanan	Regino R.	○		○		○	ユラナン（資料5）
	baseball							○	バマム（資料5）
	basketball	Alemani	José	○		○			
	basketball	Garcia	Tirso	*		○			J. Garcia（資料1）兄弟の可能性あり
	basketball	Gonzales	Jovito	○		○			
	basketball	Onrubia	Lorenzo	○		○			
*	basketball	Sebastian	Eustaquio			○			
	basketball	Suva	Geronimo T.	*		○			J. Suva（資料1）兄弟の可能性あり
	basketball	Torres	Pascual	○		○			
	basketball	Wilson	José	○		○			
	bicycling	Abella	F.	○	○				
	bicycling	Carreon	Juan	○	○	○			
	bicycling	Scheerer	D.	○	○				
	football	Daland	Henry	*		○			H. Dalaw（資料1）兄弟の可能性あり
*	football	Daland	W.			○			
*	football	Elizaga	F.			○			
	football	Garchitorena	Angel	*		○			J. Garchitorena（資料1）兄弟の可能性あり
	football	Garcia	Damaso	○		○			
*	football	Iboleon	Rafael			○			
	football	Llamas	J.	○		○			
	football	Lopez	Enrique	○		○			
*	football	Lopez	Joaquin			○			
*	football	Loyzaga	Joaquin			○			
	swimming	Aenlle	Carlos		○	○			
	swimming	Bauman	A.	○	○	○			
	swimming	Bauman	Radolfo	○	○				
	swimming	Benitez	Conrado	○	○	○			
	swimming	Brias	L.		○	○			
*	swimming	Cortes	Jose			○			
	swimming	Cristobal	L.		○	○			
	swimming	Cruz	de la		○				
	swimming	Ferrer	Magin A.	○	○	○			

	swimming	Garcia	Juan	○	○	○			
*	swimming	Musa				○			
	swimming	Pan	José del		○	○			
	swimming	Pan	R. del		○				
	swimming	Paris	José	○	○				
	swimming	Rivera	Godofredo	○	○				
	swimming	Villanueva							*Philippines Free Press*, February 8, 1913.
	tennis	Aragon	Crisanto		○				
	tennis	Fargas	Gil	○	○	○			
	tennis	Garcia	Tirso	○	○				
	tennis	Suarez	Leandro	○	○	○			
	track & field	Abad	Remigio	○	○	○	○		
	track & field	Ablan	Pedro P.	○		○	○		
	track & field	Abrera	Victorino	○	○	○	○		
	track & field	Aliermo		○	○		○		
	track & field	Almudal	Fidel	○		○			
	track & field	Angeles		○	○				
	track & field	Atillo	Nicanor	○	○	○	○		
	track & field	Ballesteros		○	○				
	track & field	Borja	Maximo	○	○	○	○		
	track & field	Cardenas	C.		○		○		
	track & field	Castañeda			○				
	track & field	Castillejos	Lino	○		○	○		
	track & field	Coscuella	J.		○		○		
	track & field	Disquitado			○		○		
	track & field	Ebro		○	○		○		Ibio（資料 4）
	track & field	Edralin		○	○		○		
	track & field	Enerva			○		○		
	track & field	Enriquez	Lorenzo	○	○	○	○		
	track & field	Lizares	F.	○	○	○	○		
	track & field	Lopes	Gil	○	○		○		
	track & field	Lozada	José	○	○	○	○		
	track & field	Macairan	Vicente	○	○	○	○		
	track & field	Panuncialman	Macario	○		○	○		
*	track & field	Paseos	Anastacio			○			
	track & field	Paz	Simeon	○	○	○	○		
	track & field	Percha	A.		○		○		
	track & field	Quintano	G.	○	○	○	○		Quintana（資料 4）
*	track & field	Remigio	Ricardo			○			
	track & field	Robillos	Pio	○	○	○	○		
	track & field	Rojas	Numeriano	○	○	○	○		
	track & field	Rosado	Felix	○	○	○	○		
	track & field	Salcedo		○	○		○		
	track & field	Samson	Emilio	○	○	○	○		
	track & field	Santos	M.	○	○				
*	track & field	Soriano				○			
	track & field	Sumarinas	Paulino	○	○	○	○		
*	track & field	Tinga	Ciriaco			○			
	track & field	Tolentino			○				
	track & field	Torralba	Margarito S.	○	○	○	○		
	track & field	Victorino	Leodegario	○		○			
	track & field	Villariña			○		○		
	track & field	Ylanan	Regino R.	○	○	○	○		
	volleyball	Aguilar	Nicanor	○		○			
	volleyball	Cruz	Pio D. Vera	○		○			
*	volleyball	Rosa	Nion			○			

資料 1：*Cablenews American*, January 28, 1913.
資料 2：*Manila Times*, February 10, 1913.
資料 3：Nereo C. Andolong, *Youth Development through Sports*, p. 213.
資料 4：Ian Buchanan, *A Handbook of Far Eastern & Asian Games*, *Track & Field Athletics*, Ian Buchanan, 1973
資料 5：駿台倶楽部編『明治大学野球部史』17 頁
＊資料 3 にしか見えない選手

された代表候補者のうち、2/3が落選した。一方、表1には候補者名簿に見えないものもたくさんおり、選抜の経緯は必ずしも明らかではない。表1で参照した資料のうち、資料3はアンドロンの著書の附録である[175]。アンドロンは1977年から1980年までフィリピンオリンピック委員会の会長をつとめた人物で、PAAFに残された資料をもとに選手の一覧表を作成したと思われるが、バレーボールに3人しか記されていないように、きわめて不完全である。しかもアンドロンのリストにしか見えない22人(表1の*)は代表に選ばれたのかもしれないが実際には参加しなかった可能性が高く除外すべきである。さらに複数の競技に出た6人を引くと合計81人となる。ただし、代表候補者の名簿から考慮すると、バレーボール選手の大半が他の競技と掛け持ちであるはずはなく、この数字は最低限のものである。フィリピン代表全体の数を記した資料には、『デモクラシア』の80人、イラナンの70人、『ファー・イースト』の100人、『真相画報』の103人などがある[176]。

中国の代表派遣

ブラウンがマニラを発ち上海へ向かったのは8月下旬のことだった[177]。上海は中国YMCAの体育活動の中心であり、かつ上海在住の体育主事クロッカーは半年ほど前にマニラに来ていたから、ほぼ確実に参加が見込まれた。中国の参加を手土産に日本との交渉に臨むというのがブラウンの心づもりだったろう。上海YMCA総主事ロックウッドによれば、それは「逃すべきではない機会のように思えたが、協会〔YMCA〕がそ

---

[175] Nereo C. Andolong, *Youth Development through Sports*, Nereo C. Andolong, 1977.

[176] *La Democracia*, February 1, 1913; Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, p. 160; E. S. Yule, "The Great Far East Olympiad"; Elwood S. Brown, "Far Eastern Olympic Games," in Athletic League Handbook, *Official Handbook of the Athletic League of the Young Men's Christian Associations of North America*, American Sports Publishing, 1913; Elwood S. Brown, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1913"; Elwood S. Brown, "Physical Work in the Philippines," *Physical Training*, vol. 11, no. 8, 1914;「東亜運動会第一次大会紀」『真相画報』17期、1913年3月1日。

[177] "Far Eastern Olympic Games," *The Straits Times*, September 5, 1912によると、8月最終週にトゥサリーが上海を訪れ、極東オリンピックの提案をしたという。この記事の情報源は*China Press*である。ブラウンは自分が中国と日本を訪れたと述べている（Elwood S. Brown, "Far Eastern Olympic Games"）。

の責任を負わねばならないことをそれが意味していることを我々は承知していた」[178]。上海 YMCA 体育主事スワンは上海 YMCA の仕事に忙しく、結局クロッカーが極東オリンピック代表の選抜と派遣を担当することになる。クロッカーは 1908 年ロンドンオリンピックでカナダ代表を率いた実績があり、まさに適任であった。のちにはセント・ジョンズ大学のスタイガー教授（George N. Steiger）の協力も得られた[179]。

日本との交渉後、ブラウンは香港に立ち寄り、極東オリンピックへの参加を慫慂した[180]。『香港デイリープレス』は、アジア人が西洋のオリンピックで成功する見込みのない今、極東オリンピックはアジアにおける西洋スポーツの普及に大きな影響を与えると同時に、東洋にいる欧米人の心にも訴えるであろうと論じている[181]。極東オリンピック開催の知らせは広東にも広がった。広東 YMCA のウィルバーは 9 月末付けの報告書で、自分が極東オリンピックに関わっていることが広東でのスポーツに威信を与え、多くの学生を集めることが容易になったと述べている[182]。

一方、クロッカーはすぐに北京に向かった[183]。北京 YMCA のホーグランドの 9 月末付け報告書によれば、オリンピックの知らせは熱狂を呼び、早くも資金集めが始まった[184]。Amateur Athletic Federation of China（漢字名不詳）が設立され、選手の選抜・派遣に当たった。会長は顔恵慶、副会長は張伯苓と何啓、名誉主事が唐国安、会計が聶其煒で、クロッカーは事務総長に推薦された[185]。顔は当時外交次長、張は天津の南開

---

[178] William W. Lockwood, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1914,”（『中国年度報告』6 巻、194 頁）。

[179] *Weekly Sun*, November 16, 1912. スタイガーについては拙稿「上海セント・ジョンズ大学スポーツ小史（1890-1925）」（森時彦編『長江流域社会の歴史景観』京都大学人文科学研究所、2013 年所収）を参照。

[180] “Far Eastern Olympiad,” *South China Morning Post*, October 3, 1912.

[181] *Hong Kong Daily Press*, quoted in Elwood S. Brown, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1912.”

[182] Francis E. Wilber, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1912,”（『中国年度報告』5 巻、400 頁）。

[183] このときブラウンが同行していた可能性もある。ブラウンの足取りは 8 月下旬から 9 月末にかけて上海と東京をまわった以外は明らかではない。

[184] Amos N. Hoagland, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1912,”（『中国年度報告』5 巻、123 頁）。

[185] William W. Lockwood, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1914,”（『中国年度報告』6 巻、194 頁）; *Manila Times*, January 23, 1913. なお副会長は前者が張伯苓、後者が何啓を挙げる。

学校校長、何は香港の弁護士・医師で伍廷芳の義兄、唐は北京の清華学校校長、聶は上海の恒豊紡績新局の支配人でいずれも YMCA と密接な関係を持つ人物であった。たとえば、牧師の父を持つ顔はアメリカ留学中に YMCA に入り、帰国後に上海 YMCA の副会長や書記をつとめている（1903-1907 年）。唐も顔と同じ時期に上海 YMCA の書記や会計をつとめた）。この 2 人は当時北京にいたが、北京に移って後も YMCA と関係を保っていた。聶は上海 YMCA 体育部の委員、張は天津 YMCA 総幹事で第 1 回全国運動会にも関わった。Amateur Athletic Federation of China は極東オリンピック後に解消されたようで[186]、関連史料もなく、中国の体育史では忘れられた存在になっている。2 か月に及ぶ奔走の末、クロッカーはブラウンへの手紙でマニラに強力なチームを送ることを約束することができた[187]。

ブラウンは最新のフィリピン記録一覧を中国側に渡していたが、中国代表選手との比較によれば、清華学校出身の潘文炳は 100 ヤードでタイ、走幅跳は 20 フィート 3 インチとフィリピン記録を上回る記録を有していた。同じく清華の黄純道は 220 ヤードを 24 秒 6、440 ヤードを 56 秒で走り、いい勝負になると予想された。なかでもフィリピン側が恐れていたのが南洋公学出身の張春齢であった。張は留学先のイェール大学のガードナー（Robert A. Gardner）から指導を受けた。ガードナーは 1912 年に世界で初めて棒高跳で 13 フィートを越える記録をマークした人物であり、またアマチュアゴルフの全米チャンピオンとしても有名である。張の記録は 10 フィート 6 インチでフィリピン記録を 5.5 インチ上回っていた。中国側の委員たちは優勝する可能性は十分あると考えていた[188]。

1 月 30 日に広東 YMCA のウィルバー率いる南中国の代表がマニラに到着した。波止場にはすでに小呂宋中国商務総会をはじめとする主要団体の代表を含む約 2,000 人の中国系住民が歓迎に来ていた（当時のマニラの中国人人口は約 2 万人）。タラップから

副会長が 2 人だったのか、最初張伯苓だったがのちに何啓に代わったのか、たんにどちらかの資料に誤りがあるだけなのか、現時点では判断がつかない。

[186] 会長の顔恵慶は 1913 年 1 月末にドイツ公使に任命されて中国を離れ、秘書の唐国安は同年 8 月に亡くなっている。

[187] *Manila Times*, November 23, 1912.

[188] *Manila Times*, January 31, 1913.

下りてきた選手たちはしゃれた洋服に身を包み、流暢に英語を話した。『マニラ・タイムズ』の記者が「中国の住民であるとは思えない」との感想を抱いたのも無理なからぬことであった。なぜならそれは日本の選手――そろいの学生服を着て英語を話せない――とは対照的だったからである[189]。

北中国の代表は1月23日に上海YMCAのスワンと清華学校体育主任シューメイカー（Arthur Shoemaker）に率いられて上海を出発した。そのさい、桟橋で「多数のファン」に見送られた[190]。一行は南中国代表の1日後にマニラに到着した[191]。中国から来た選手たちは現地の中国人社会を大いに活気づけた。彼らはホテルや移動の費用をすべて肩代わりし、ありとあらゆる形で選手たちを歓待した[192]。中国国民党マニラ支部も選手たちをもてなした[193]。ある中国人商人によれば、「中国人は300年間フィリピンにいるが、そのなかで最も幸福だったのは、中国のスポーツチームをマニラに迎えた時だった[194]」。選手はみなリサール通りのオテル・ド・フランスに宿泊したが、そこは「映画館の隣の騒々しくて混雑したホテル」で、選手たちには不評だった[195]。在マニラ中国人の熱狂はのちに中国人向けYMCAの設立につながることになる。

中国代表が何人いたかは資料によってまちまちではっきりしない[196]。最も信頼できる数字は、北中国選手団を率いたスワンによるもので、彼は18人の選手を率いたと証言している。スワンは南中国も18人だったと述べている[197]。『真相画報』は36人とする[198]。

---

[189] *Manila Times*, January 30, 1913. 拙稿「なぜbaseballは棒球と訳されたか：翻訳から見る近代中国スポーツ史」『京都大学文学部研究紀要』55号、2016年3月も参照。

[190] "Far Eastern Olympic Games," *The North-China Herald*, January 25, 1913.

[191] *Manila Times*, February 1, 1913.

[192] Elwood S. Brown, "Far Eastern Olympic Games."

[193] *Manila Times*, January 30, 1913.

[194] William W. Lockwood, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1913,"（『中国年度報告』6巻、194-195頁）。

[195] Wei Hwen Tsang, "China in the First Far Eastern Olympiad," *St. John's Echo*, vol. 24, no. 3, April, 1913.

[196] 選手到着前の報道は45人前後とするものが多い。最多は*Manila Times*, January 23, 1913の47人。

[197] "Far Eastern Olympic Games," *The North-China Herald*, February 22, 1913; Alfred H. Swan, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1913,"（『中国年度報告』6巻、217頁）。

[198]「東亜運動会第一次大会紀」。

一方で、複数の資料が開会式の中国選手団の人数を42人としている[199]。シューメイカー、スワン、ウィルバーがこの数字に入っているかどうかは不明である。このほかウィルバー、伍廷芳、イラナンは40人と述べている[200]。表2はさまざまな資料に見える中国人選手を一覧にしたものである。名簿としては、『ノースチャイナ・ヘラルド』に北中国代表18人、『サウス・チャイナ・モーニング・ポスト』に南中国代表20人の名が掲載されている（表2資料1）。『マニラ・タイムズ』の報道で言及された中国人は28人いる（表2資料2）。このほか、阮蔚村編、沈嗣良校『遠東運動会歴史与成績』（勤奮書局、1933年）が歴代極東大会の選手リストを掲げており、第1回は26人の名が記されている（表2資料3）。ただし、阮のリストには問題が多い。たとえばChen Yanを張愈とするが、実際には陳彦である[201]。面白いことに、大日本体育協会編『第十回極東大会報告書』も張愈となっている。他の名前についても報告書は阮の間違いを踏襲していることから、報告書が阮のリストを参考にしたか、もしくは両者が同じリストを情報源にしていることが考えられる。表2の丁源以下は参加した可能性が低い。丁源と馮平は『中国排球運動史』『中国足球運動史』にしか見えないが、これらの書籍は信憑性が低い。阮のリストのうち、何偉卿、黄仁譲、黄柏松、吉子英、梁棣芳、楊景鐸、姚醒黄は第2回や第3回の極東大会に参加しているが、第1回の極東オリンピックに参加した痕跡はなく、誤りであろう。たとえば、姚醒黄は1913年当時、上海のセント・ジョンズ（大学もしくは中等部）に在籍していたが、校内雑誌で彼の活躍が初めて報じられるのは第2回極東大会の直後であり[202]、そんな彼が1913年に中国代表になったとは考えられない。したがって、表2から実際に参加した可能性が高いのは葉坤までの39人ということになる（ここにスワンら3人を加えると、開会式の42人という数字に一致する）。

---

[199] *Manila Times*, February 1, 1913; E. S. Yule, “The Great Far East Olympiad”; “Far Eastern Olympiad,” *South China Morning Post*, February 5, 1913.

[200] F. E. Wilber, “Oriental Olympiad,” *South China Morning Post*, February 13, 1913; 伍廷芳「遠東運動会攷略」、Regino R. Ylanan and Carmen Wilson Ylanan, *The History and Development of Physical Education and Sports in the Philippines*, p. 160.

[201] たとえば、Hu Hung Houを古熊彪としたのは、古が当時の有力選手であり、音が似ていたからだろう。Yau Kay Cheungを楊景鐸としたのも同様のロジックである。Chan Yinを張愈としたのはまったくの当て字で、適当な人物が思いつかなかったのだろう。

[202] “The Intercollegiate Meet,” *St. John’s Echo*, June, 1915.

表２　中国代表名簿

漢字名	英字名	資料1	資料２	資料3	資料４	出場競技	英字名備考	漢字名備考
陳彦	Chen Yan	南	2/4, 2/5, 2/10	○	排球史	陸上、排球	Chan Yin	阮蔚村「我国著名運動選手名録（一）」『体育周報』38期、1932年10月22日、資料2、『第十回極東大会報告書』は張兪につくる
張栄漢	Cheung Wing Hong	南		○	足球史、排球史	蹴球、籠球、排球		
張春齢	Chow, Clarence S. K.	北	1/30, 2/4, 2/5, 2/7	○		陸上		
	Chu Chi-wei	北	1/28, 2/4			陸上	Chua Chai Wei, Chu Chi-mei	
	Chu Shen-min	北						
許民輝	Fu Man Fai	南	2/5, 2/7, 2/10		足球史、排球史	陸上、蹴球、排球		
馮啓明	Fung Kai Ming	南	2/4, 2/6, 2/10			陸上、水泳、蹴球	*Cablenews American* February 4, 1913は水泳40yardにTung Kay Ming、220yardにFung Kai Mingが出場したとするが同一人物であろう	
胡宏華	Hu Hung Hou	北	2/7, 2/10			陸上	Hu Hung Hwa	『第十回極東大会報告書』は古熊彪につくる
黄灝	Huang Hao	北	1/28, 1/30, 2/7, 2/10	○		陸上	Huang Gao, Huang Ho	資料2は黄澎、阮蔚村「我国著名運動選手名録（一）」は黄影につくる
黄純道	Huang Shun tao	北	1/28, 1/30, 2/4			陸上、庭球	Huang Shen-tao, Huang Shuen-tao	
黄元道	Huang Yuen tao	北	2/4, 2/5, 2/6, 2/7, 2/10	○		陸上	Huang Yuentay	
高恩養	Kao, Edward	北	2/4, 2/6, 2/7, 2/10, 2/11			陸上		
関頌声	Kwan Sung Sing	北	2/7, 2/10		足球史、排球史	陸上、蹴球、排球		排球史は黄頌声につくる
郭宝根	Kwok Po Kan	南		○	足球史、排球史	蹴球、籠球、排球		
郭兆仁	Kwok Shui Yan	南				陸上、蹴球	Kwok Siu Yan, Kwok Shiu-yau	
	Lam, James. A.	南				水泳、自転車		
	Lapp, George	南				水泳		
	Lee, George	南				水泳、自転車		
梁栄泰	Leung Wing Fai	南	2/6		足球史	蹴球、水泳		
李茂祥	Li Meu Piang	北	2/4			陸上	Liu Men-ziang	
李文昌	Li Wen-chang	北	2/5, 2/6, 2/7, 2/10	○		陸上		
劉明義	Liu ming-i	北	2/10	○		陸上		
盧頌恩	Lu Tson en	北	2/5			陸上		
莫慶	Mok Hing	南		○	排球史	蹴球、籠球、排球		
	Moy Hing, A. Edward	南	2/6			水泳、自転車	E. Hoyhing, A. E. Hay Ming, A. E. Moy Hing	
彭甲友	Pang Kap Yau	南		○		蹴球		

潘文炳	Pang Wen Ping	北	1/28, 1/30, 2/4, 2/5, 2/7, 2/10	○		陸上、庭球	Pau Wei Ping, Pan Win Ping	『第十回極東大会報告書』は藩文彬につくる。阮は潘文炳、潘文彬の両方を記すが誤り
彭松長	Pung Chung Tseung	南	2/6		足球史、排球史	陸上、水泳、蹴球、排球		
唐榕柄	Tang Wen Pang		2/4			陸上	Tong Yung Ping	
唐福祥	Tong Fuk Cheung	南		○	足球史、排球史	蹴球、排球		
韋憲章	Wei Hsien tsang	北	1/30, 2/5, 2/7, 2/10			陸上	Wei Hyien-tsang	
韋煥章	Wei Hwen tsang	北	1/30, 2/4, 2/6, 2/10, 2/11	○		陸上	Wen Hwen-tsang	阮蔚村「我国著名運動選手名録（一）」、資料2、『第十回極東大会報告書』は韋輝章につくる
韋栄洛	Wei Wing Lock	南	2/3, 2/4			庭球	Wei Weng Lock	
黄保強	Wong Po Keung	南				庭球		漢字名は『進歩雑誌』8巻3号、1915年6月による
黄保奇	Wong Po Kie	南	2/3, 2/4			庭球		漢字名は『進歩雑誌』8巻3号、1915年6月による
楊錦魁	Yang King-kwei	北	1/28, 2/4, 2/5, 2/7, 2/10, 2/11	○		陸上	Yang Kin Kwei	
邱紀祥	Yau Kay Cheung	南	2/4, 2/5, 2/7	○	足球史、排球史	陸上、排球、蹴球		『第十回極東大会報告書』は楊景鐸につくる
葉桂馥	Ye Kwei Fu	北	2/4, 2/5, 2/7, 2/10			陸上	Yeh Kwei Fu, Tip Kwei Fu	
葉坤	Yp Kwan	南	2/4, 2/5	○	足球史、排球史	蹴球、排球、水泳	Ip Ewan	
丁源					足球史	蹴球		第3回極東大会出場
馮平					足球史、排球史	蹴球、排球		第3回極東大会出場
梁誠信				○	排球史	蹴球、籠球、排球		阮蔚村「中国足球史（一）」『体育周報』46期、1932年12月17日
何偉卿	W. H. Ho			○		水泳	英字名は『進歩雑誌』8巻3号、1915年6月による	第2回極東大会出場
郭晏波						蹴球		阮蔚村「中国足球史（一）」『体育週報』1巻46号、1932年12月17日
黄仁讓				○		籠球、排球		第2回極東大会出場
黄柏松	Wong Pak Chung			○		蹴球		第3回極東大会出場
吉子英	T. Y. Chi			○		陸上	英字名は『進歩雑誌』8巻3号、1915年6月による	第2回極東大会出場。阮蔚村「我国著名運動選手名録（一）」『体育周報』38期、1932年10月22日は第2回のみ言及
梁棣芳	T. F. Leung			○		蹴球	英字名は『進歩雑誌』8巻3号、1915年6月による	第2回極東大会出場
楊景鐸	K. D. Yang			○		陸上		阮蔚村「我国著名運動選手名録（一）」『体育周報』38期、1932年10月22日
姚醒黄	Yao Sing-waung			○		陸上	英字名は*St. John's Echo*, June, 1915による	第2回極東大会出場

資料1：北　*North China Herald*, January 25, 1913／南　*South China Morning Post*, January 27, 1913.
資料2：*Manila Times.*
資料3：阮蔚村編、沈嗣良校『遠東運動会歴史与成績』。
資料4：排球史＝『中国排球運動史』35頁、足球史＝『中国足球運動史』47頁。

日本の代表派遣

8月22日マニラ駐在日本領事代理杉村恒造から翌年2月のカーニバルにあわせて東洋オリンピック大会の開催を協議しているとの手紙が寄せられた[203]。そのちょうど1か月後、PAAFを代表してブラウンが総督と軍司令長官の手紙を携えて東京にやってきた。本来なら上海でそうだったように、YMCA体育主事が窓口となるはずだった。しかし、日本にはYMCA体育主事は1人も派遣されていなかった。正確に言うと、YMCA国際訓練学校を卒業し、帰国後にスポーツの普及に尽力していた大森兵蔵が東京YMCAの体育主事になっていたが、東京YMCAは彼の活動に冷淡で、大森は1年ほどで辞任していた。大森は日本代表監督としてストックホルムオリンピックに参加し、その帰途で亡くなった(1913年1月)。東京で中国人留学生を対象に活動していたYMCA主事コールは、9月30日付けの報告書でブラウンが大きな成功を収めつつあることを記したあと、極東オリンピックまでに体育主事が来れば、大きな「スクープ」になるだろうと述べている[204]。しかし、フランクリン・ブラウン（Franklin H. Brown）が来日したのは1913年10月のことで、極東オリンピックには間に合わなかった。

東京でブラウンがまず訪れたのは早大教授安部磯雄だった。安部が窓口となったことにはいくつかの理由があった。第一に、大隈重信との関係である。大隈は自身が創設した早大に多数の中国人留学生を受け入れており、東京で中国人留学生を対象に活動していたYMCAと関係が深かった。YMCAは大隈に極東オリンピックのトロフィーの寄贈を働きかけてもいる[205]（大隈はのち極東体育協会総裁となる）。第二に、安部はこの年早々にマニラ遠征をした早大野球部の部長であった。第三に、当時大日本体育協会は会長の嘉納治五郎と総務理事の大森兵蔵がストックホルムに遠征中で、残る幹事は安部と永井道明だけだった。第四に、安部はクリスチャンだった（京都YMCAの発起人の一人でもある）。永井はブラウンとの交渉の経緯を次のように記している。

---

[203] 大日本体育協会編『第十回極東大会報告書』2頁。

[204] George H. Cole, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1912,”（『中国年度報告』5巻、302頁）。

[205] Elwood S. Brown, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1912.” また『大阪毎日新聞』1912年12月30日にも、「馬尼剌駐在日、支両領事よりも夫々優勝杯の寄贈ありたりと尚大隈伯も何等かの表彰方法を講ずべく目下考案中なり」という記事がある。

大日本体育協会長嘉納治五郎先生は、瑞典出張中で不在だつたので、安部磯雄氏が主として会談の任に当られ、余も時々加はつた。当時日本人の心中には、万国オリンピツクに初めて参加したので、狭い極東フイリツピンや支那を相手にすることは物足らぬとの感があつたようだ。余等はそれも一応尤ものことゝ思つた。然し余は天下を相手にする者は、先ず隣人を相手にすべきものと思つた。遠交近攻などは昔の支那人の寝言で、今日の支那人でも之を学ぶべきでない。況んや、公明正大なるべき日本国民の取るべき策ではないという意見のもとに話をすゝめていた。但しオリンピツクという名称は、世界オリンピツクにのみ用うべきものであるから、其の名には賛成しなかつた。嘉納会長帰朝後オリンピツクの名は勿論その参加すら難色があつた[206]。

安部と永井は規約にサインし、40 ～ 50 人の代表を派遣することをブラウンと約束した[207]。当時フランスにあってこの報告に接した嘉納は「日本は世界的な国際オリムピツク大会に出場する事は望む処であるが、些々たる極東競技に加入することは望まない。且つ既に大きな国際競技の協会もあり、世界的に開催して居ることでもあるから、その上に限局された極東競技会を別に組織しないでも良いだらふ」という意見だった。そして IOC のメンバーにこのことを話したところ、彼らも同意見だったという[208]。『第十回極東大会報告書』は大日本体育協会が消極的態度をとった理由を次のように記す。

斯く体協が三回頃まで冷淡であつたのは、大会の諸規約が在比支の米人が作製したものであること、然かもその米人が基督教関係でその宣伝に利用すると云ふやうな漠然たる輿論につられ、当時東洋に於ける唯一のＩ・Ｏ・Ｃメンバーを有してゐた日本としては極東大会よりは国際オリムピックと云ふ優越感も含まれてゐた。且つ体協の財政は創立間も浅く甚だ心細いもので、隔年毎に国際競技へ日本の面目を維持する大チームを出場させる見透しが付かなかつたことなどに起因する[209]。

国際オリンピック参加を目的として設立され、最初のオリンピック参加を果たしたば

[206] 永井道明先生後援会編『遺稿永井道明自叙伝』体育日本社、1951 年、63 頁。
[207] Elwood S. Brown, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1912.”
[208] 大日本体育協会編『第十回極東大会報告書』2 頁。
[209] 大日本体育協会編『第十回極東大会報告書』4 頁。

かりの大日本体育協会が極東オリンピック参加に難色を示したのは無理もない[210]。報告書は財政的理由を挙げるが、安部と永井が参加に向けて尽力したことから考えると、嘉納の個人的態度に帰するところが大きいであろう。嘉納は弘文書院の創設者として日中友好のシンボル的存在となっている。その嘉納がなぜ中国やフィリピンとの交流を拒否したのか。

平田諭治によれば、嘉納の思想は「西欧功利主義的実利主義的思想」を前提とするもので、「西欧世界を基準とし、日本との三角関係から「アジア／中国」を蔑視・黙殺する」ものであった[211]。そうした嘉納の世界観、中国観は次の文章によく表れている。

> 東洋の先進国をもって自ら居れる日本国は、かの憐れむべき四億の清国人を提撕誘導し、これに授くるに二十世紀の新智識をもってし、彼の蒙昧を啓き彼が天与の利源を開拓し、もって廻瀾を既倒に起すがごときあに絶大の快事にあらずや[212]。

嘉納は典型的な社会進化論的世界観を持ち、日本人に「この競争場裡の優勝者たるべき覚悟」を求めていた。この競争的世界における交際のあり方は「決して他国の権利を侵害せず、他国民を軽侮せず、正義直道によりてこれと交際し、親睦を本とし、友情を尽すべし」というものであった。これはオリンピックの体現する国際主義的平等主義的世界観に一致するように見える。しかし嘉納は、交際の相手は優勝者たるべき実力を備えているという前提をつけており、要するに欧米諸国を念頭にしていた[213]。「未開劣等の国」は「優勝者」の「雄飛の舞台」でしかなかった。こうした嘉納の思考から類推すれば、半植民地の中国や植民地のフィリピンと対等に「交際」すること、そしてその場を日本ではなくしてアメリカ（のキリスト教関係者）が用意したことに反発の念を抱いたことは容易に理解できるだろう[214]。アメリカは門戸開放主義に基づき、

---

[210] ストックホルムオリンピックには28か国が参加（フィンランドやカナダなど独立「国」でないものも含む）、うち欧米以外の地域からは、チリ、エジプト、南アフリカ、トルコ、オーストラリアが参加した。

[211] 平田諭治「嘉納治五郎の留学生教育を再考する：近代日中関係史のなかの教育・他者・逆説」『筑波大学大学院総合科学研究科教育基礎学専攻　教育学論集』9集、2013年2月。

[212] 嘉納治五郎「盛んに海外に出でよ」『国士』5巻39号、1901年12月。

[213] 嘉納治五郎「対外の覚悟」『国士』4巻32号、1901年5月。

[214] 嘉納は弘文書院の教育主任を任せた本田増次郎がキリスト教に改宗したのを知り、即刻破門した（ただし、両者の関係はその後も続く）。

自由主義的、資本主義的な新しい秩序を極東にもたらそうとしたが、この地域に既得権を有する日本にとって、その背後にあった帝国主義的野心に敏感にならざるをえなかった。嘉納はこのような日本の帝国主義的利害を代弁する「国士」にほかならなかった。嘉納の極東大会に対する不信感は以後も消えることはなかった。

安部は11月末までに嘉納からの返事が来ると考えたが、12月に入っても返事はなかった。ブラウンは安部に野球以外に8名の選手を参加させることができたら野球チームの遠征費用を負担すると申し出ており、安部は嘉納の返事が届き次第、準備に取りかかるつもりだった。12月10日にブラウンは安部に嘉納からの返事が来たかどうかを問い合わせた[215]。安部は（OKの）返事がもうすぐ来ると考えて、ブラウンに肯定的な回答をしたのだろう。17日の『マニラ・タイムズ』は、日本の代表は、中国や他の国々と同じく、完全なチーム（フルエントリーするという意味だろう）になると報じた[216]。安部は自身が部長をつとめる早大野球部を派遣しようと考えたようだが、「学校側の主張と一致せず」との理由で渡航は中止となった[217]。主催者側は次に慶大を呼ぼうとしたが、3月に試験があるということで断わられた。この話を聞きつけた明大の山村一郎は平沼亮三を介して招待を譲り受けることに成功した[218]。前年度の実績のあるテニスも選手を派遣すべく交渉がなされたが、結局これは実現しなかった。陸上競技については、ブラウンが大阪毎日新聞社と交渉し、その結果、選手2名を同社の費用で派遣することが決まった[219]。こうして、24日に安部は明大野球部と陸上競技の選手2名が参加する旨をブラウンに伝えることができた。安部が嘉納からの返答を受け取ったのはその翌日で、2月に戻るまで準備を延期せよというものだった（実際に嘉納が帰国したのは3月6日だった）。つまり事実上、参加を見合わせよとの指示であった。しかしこの時点で参加を急に取りやめるわけにはいかず、安部と永井は「今後永久の事は引き受けられぬが、来年の事は兎に角自分等に於て引き受けやう。野球、走者、庭球についても

[215] "Far Eastern Olympiad," *The Far East*, January 25, 1913.

[216] *Manila Times*, December 17, 1912.

[217]『大阪毎日新聞』1912年12月29日。

[218] 山村一郎「マニラ遠征の想い出」（駿台倶楽部明治大学野球部史編集委員会編『明治大学野球部史』1巻、駿台倶楽部、1974年所収）。

[219] 山本邦夫『近代陸上競技史』上巻、道和書院、1974年、270頁。

出来る丈けの事は尽力」することにした[220]。

明大野球部は28日に招待状を受け取り、翌年1月11日の電報で大会の詳細が伝えられ、その日に横浜を出航するコリア丸に乗らねば間に合わないことが判明した。選手たちは慌てて準備し、長崎でコリア丸に乗り込んだ[221]。マニラ遠征に参加したのは、佐竹官二監督以下、選手11名、他2名であった。

『大阪毎日新聞』が陸上競技選手の派遣を発表したのは1月7日であった。派遣の理由は、「東洋オリムピツク大会は東洋空前の大競技会にして、之に参加すべき在東洋各国人実に十五ケ国を越え、盛況殆んど比なからんとす。是を以て吾社は日本運動界のために万丈の気を吐くべく、競走界の勇者を選抜して派遣せんことを計画せる」からであった。「十五ケ国」は明らかに誇大宣伝である。同社が派遣するのは、愛知一中の田舎片善次と同社社員の井上輝二であった。田舎片は1年前の大阪箕面間クロスカントリーレースで優勝し、井上は1909年春の阪神間マラソンで優秀な成績を収めていた[222]。これら2つの大会はいずれも『大阪毎日新聞』が主催したもので、後者はとくに「マラソン」という語を冠した最初の大会だったことで有名である。大阪毎日新聞社は当時スポーツイベントの開催に最も熱心であり[223]、ブラウンが働きかけたのもそのためであった。井上は記者との兼任で、マニラから大会の模様を伝えることになる。

陸上競技選手2人は1月7日、すなわち『大阪毎日新聞』でその参加が報じられたその日に神戸から八幡丸に乗り、17日にマニラに着いた。明大野球部一行は22日にマニラに到着し、杉村領事、三井物産マニラ支店長三神敬長をはじめ多数の在留邦人に迎えられた[224]。

---

[220]『大阪毎日新聞』1912年12月29日。

[221] "Far Eastern Olympiad," *The Far East*, January 25, 1913.

[222] このときの井上の成績は20人中7位だったが、1週間前に開かれた予選会では優勝していた（『大阪毎日新聞』1909年3月15、22日）。井上は田舎片が優勝したクロスカントリーレースにも出場したが、上位50位に井上の名はない（『大阪毎日新聞』1911年4月29日）。

[223] 大阪毎日新聞社と初期オリンピックとの関係は、浜田幸絵『日本におけるメディア・オリンピックの誕生：ロサンゼルス・ベルリン・東京』ミネルヴァ書房、2016年、29-32頁を参照。

[224] 中澤不二雄「マニラ遠征日誌」（駿台倶楽部明治大学野球部史編集委員会編『明治大学野球部史』所収）。

開会式

1月31日午後4時、1万人の観衆が見守るなか、治安警察隊音楽隊の演奏に合わせて、役員選手の入場行進が始まった。この入場行進はストックホルムオリンピックにならったものだった[225]。極東オリンピックの生みの親であるブラウン、トゥサリー、クローンの3人が先頭を歩いた。次いで、ショーメイカー、スワン、ウィルバーが率いる中国選手団、明大野球部と2人の陸上競技選手からなる日本選手団、そして最後にフィリピン選手団が登場した。旗手はテニスと野球に出場するファルガスで、彼が手にしていた国旗はもちろんアメリカの国旗であった[226]。なぜなら、フィリピンでは1907年8月23日に国旗法が制定され、フィリピン国旗を掲げることができなかったからである。しかし、フィリピンの選手は胸にフィリピンの国章（中国と日本の選手は国旗）をあしらった服を着ていた[227]。フィリピンの民族意識に配慮した結果であろうか。選手たちは極東オリンピック会長フォーブズ総督のいる観覧席の前まで来ると、みな帽子を取って挨拶をした。観覧席にいたのはみなアメリカ人だった。行進が終わると、フォーブズ総督が開会の辞を述べた。

> フィリピン諸島の政府と人民の名において、この第1回オリンピック大会で競技するためここに集まった、中国の新しい共和国と、大日本帝国と、フィリピン諸島の競技者であるあなたたちの前に立って、あなたがた全員に心からの歓迎を述べることは、私の名誉とするところです。私はすべての競技がフェアプレイの精神に則って実施されることを望みます。その精神はのちのち大人になってビジネスや他の職業においてあなたがたの行為を律するでありましょう。私は最良の競技者が勝利し、最良のチームが賞を勝ち取ることを望みます[228]。

フォーブズが目の前の東洋人を子供と見ていたことは明らかである。実際、多くの選手は高校生や大学生だったが、フォーブズにとっては、たとえ年齢的には大人であっても、フィリピン人や日本人や中国人はアメリカの保護や指導を必要とする「子供」でしかなかった。「ビジネス」というフォーブズお決まりの言葉については後述する。

---

[225] Elwood S. Brown, “Far Eastern Olympic Games.”
[226] E. S. Yule, “The Great Far East Olympiad.”
[227] Elwood S. Brown, “Far Eastern Olympic Games.”
[228] *Manila Times*, February 1, 1913.

開会の辞に続いて、サン・ニコラス小学校とマラテ小学校の生徒700人による合唱と体操が披露された。彼らが歌ったのは、「ヤンキー・ドゥードゥル」と「アロハ・オエ」だった[229]。『デモクラシア』はこのとき女子生徒が来ていた洋服を、「我々の感情の脱フィリピン化と我々の性向の急速なアメリカ化に大いに貢献した」が、きわめて「滑稽」に見えると記している[230]。ここには、男性の近代化＝アメリカ化を賞讃する一方で、女性のそれを脱フィリピン化として憂えるフィリピン人男性のジェンダー観がにじみ出ている[231]。

サッカーと民族問題

中国チームは香港の琳瑯幻境社と孔聖会の選手で構成されていた[232]。一方、フィリピンの選手はサンドウとボヘミアンの2つのチームから選抜されていた。2月4日の両者の対戦は、前半を1対0とフィリピンの1点リードで折り返した。ハーフタイムのときショーメイカーは、中国チームは純粋な中国人で構成されているのに、フィリピンチームには多くのメスチソが混じっており、少なくとも1人は純粋のスペイン系である、自分たちも上海などから混血児を連れてくることだってできたが、純潔の東洋人だけが参加を許されると考えてそうしなかった、と抗議をした。試合はそのまま続けられ、中国は1対3で負けた。実行委員会はこの問題が今後に大きな影響を及ぼすことを危惧し、あらためて協議した結果、この試合を公開試合扱いとし、厳密にフィリピン人のみのチームを選んで再試合を実施すると決定した[233]。2月6日、オリンピッ

---

[229]「ヤンキー・ドゥードゥル」はアメリカ独立戦争時の愛国歌である。とはいえそれはよく演奏される曲であり、どれほど政治的意図があったかは不明である。なお、生徒の数は資料によって500人とするものもある。

[230] *La Democracia*, February 1, 1913.

[231]式典に見えるこうしたジェンダー観についてはヒュブナーの詳細な分析に譲る（Stefan Huebner, *Pan-Asian Sports and the Emergence of Modern Asia*）。

[232]張彩珍主編『中国足球運動史』武漢出版社、1993年、47頁には、8名しか出場できなかったとするが（典拠は不明）、マニラの新聞にそのような記述はなく、「the Philippines and China soccer football elevens」（*Manila Times*, February 7, 1913）との表現もあって、8名というのは誤りと思われるが、詳細は不明。サッカーで起こった民族問題についてはモリスも触れているが、資料は『マニラ・タイムズ』しか用いていない（Andrew D. Morris, *Marrow of the Nation*, pp. 24-25）。

[233] *Manila Times*, February 5-6, 1913; *Philippines Free Press*, February 6, 1913; *La Democracia*,

ク実行委員会は、国籍が疑わしい選手については、自らがフィリピン人であると宣言すればよいという見解を発表した。中国側はただちに抗議を取り下げ、4日の試合が正式の試合と認定された。最も疑いをもたれた選手は、スペイン人ではなく、アメリカ人の父をもつヘンリー・ダランであった[234]。

植民地政府系の進歩党（Partido Nacional Progresista）機関紙『デモクラシア』は、英語新聞とは違った角度からこの事件を報じている。同紙によれば、この抗議は中国代表のものというよりは、むしろマニラにいる一部の好戦的愛国主義者（jingoistas）によるもので、彼らは純粋のフィリピン人から構成されていないチームが勝ち取った栄誉を貶めようと目論んでいたのである。これに対して、中国チームは理解ある態度をとり、フィリピン側の説明を受け入れ、この試合が有効とされるに至ったとする[235]。同紙が批判した好戦的愛国主義者とは、いうまでもなく国民党の人々である。ここからは、フィリピンのあるべきネイション像の対立――進歩党が（白人を含む）多民族的なものを想像していたのに対して、国民党が純粋のフィリピン人なる概念を楯に白人を排除しようとしていた――が浮かび上がってくる。アメリカ人と進歩党がサッカーの勝利を「文明化の使命」の成功に読み替えようとしたのに対して、国民党（の一部の人々）はそのような位置づけに反発したのである[236]。

ところで、当の中国人はこの事件をどのように理解していたのだろうか。韋煥章は帰国後にこう記している。

> 我々はこの試合に負けたが、それは我々が無力だったからではなく、我々が失望し落胆したからであった。我々はネイティブ・フィリピン人との熱戦を期待して試合に臨んだが、我々〔中国人〕や見物人が非常に驚いたことに、我々はボヘミアンという名のメスチソのチームと対戦した。彼らは我々の不幸なイレブンより

February 5, 1913. *Cablenews American*, February 5, 1913, 大日本体育協会編『第十回極東大会報告書』65頁、張彩珍主編『中国足球運動史』47、338頁は2対1とするが誤り。*Cablenews American* は2月7日に3対1に訂正している。

[234] *Manila Times*, February 7, 1913; *Cablenews American*, February 7, 1913.

[235] *La Democracia*, February 6, 1913.

[236] 国民党党首のオスメーニャは開会式に出席し、またバスケットボールのトロフィーを寄贈するなど、極東大会を支持する姿勢を見せていたが、それは彼がアメリカ的な大会の位置づけを承認していたことを意味するわけではない。

かなり背が高く大きかった。もちろん、我々は彼らと戦ったが、すでに落胆していたのに、なにができただろうか[237]。

無念やるかたない感じが伝わってくる。しかし、中国人（そのチームは漢族だけで構成されていた）が考えるほど、フィリピン人とそうでないものを区別するのはたやすいことではなかった。ウィルバーもネイティブ・フィリピン人と対戦するつもりだったが、そんなチームはフィリピンにはなく、選手たちは法的にも忠誠によってもフィリピン人であり、不公正の疑いはないと認めている。とはいえ、ウィルバーは中国人選手より 10 キロほど重く、年齢も上で、経験も積んでいたとも述べており、必ずしも納得しているわけではなかった[238]。

野球とアマチュア主義

日本とフィリピンの第１戦は２月１日におこなわれた。極東オリンピック最初の競技であり、大いに注目を集めた[239]。しかし明大側の耳に届いたのは、日本はとても勝てないという噂だった。キャプテンの斎土直矢は、「日本を代表しての出場で、負けられない」との思いが強すぎ、眠れない夜を過ごした。それもそのはず、マニラでは領事をはじめ在留日本人の世話になりっぱなしで、国を代表しているとの強い意識があったからである[240]。

１万人の観衆が見守るなか、始球式でマウンドに上がったのは、元中国駐米公使伍廷芳だった[241]。中沢不二雄がバッターボックスに立ち、マヌエルがミットをかまえた。

---

[237] Wei Hwen Tsang, “China in the First Far Eastern Olympiad.” 体格の違いは『マニラ・タイムズ』の記者にも明らかで、中国人は体重の不足をスピードで補ったと記している（*Manila Times*, February 5, 1913）。

[238] F. E. Wilber, “Oriental Olympiad.”

[239] *Manila Times*, January 30, 1913.

[240] 中沢不二雄「マニラ遠征日誌」、山村一郎「マニラ遠征の想い出」。

[241] 伍は前年春に司法総長を辞任し、上海で隠居していた。伍のみならず、夫人の何妙齢も YMCA と関係が深かった。たとえば何は YMCA が 1905 年秋に開いた運動会の後援者であった（Robert E. Lewis, “Annual Report for the Year Ending September 30, 1906,”（『中国年度報告』2 巻、461 頁））。なお観客数は駿台倶楽部明治大学野球部史編集委員会編『明治大学野球部史』17 頁に拠る。*Manila Times*, February 3, 1913 は 5,000 から 1 万の間とする。Elwood S. Brown, “Far Eastern Olympic Games” によれば、野球場の観客席は 5,000 人分だった。

トゥサリーは、この光景を「大きな国際的重要性を持つ歴史的な出来事を示していたが、そのことを完全に理解するものはほとんどいなかった」と記している[242]。試合そのものは6対0で明大が完封勝ちした。明大ナインはその晩領事館で日本食を御馳走になった。翌2日はキリスト教の安息日（日曜日）だったので試合はなかった。これはカーニバル競技会との大きな違いで、極東オリンピックのキリスト教的性格を示している。フィリピンとの2度目の試合は3日の月曜日に実施された。今回の観衆は3万に達した。明大は今度も6対2でフィリピンに勝ち、野球の選手権を獲得した。かくて明大は「アメリカの国技における最初の名誉をアメリカの植民地からもぎ取った」のである[243]。

明大はこのあとオープン競技会に参加し、高校選抜、全陸軍、海軍、マニラ YMCA、メラルコ（マニラ電力）と対戦し、3勝2敗の成績を収めた。このうち、陸軍は昨年の遠征で明大に負けていたので、その仇を打つべく「大変な意気込み」だった[244]。試合結果は1対6で明大が完敗した。山村一郎によれば、試合後宿舎に戻ると、陸上競技の田舎片選手からこの試合で問題が起こっていることを知らされ、三井物産マニラ支店長の三神敬長とオリンピック委員会に行ったところ、「アミーの中にプロフェッショナルがいると思うか」と聞かれ、「それなら一塁とライトだろう」と答えると、「実はそうなんだ」とのことだった[245]。明大の選手は、プロの存在をなんとなく感じてはいたが、自分たちで抗議をしたわけではなかった。日本でもアマチュアの観念はまだ浸透しておらず、彼らはそれが重大な問題であるとは認識していなかった。

翌日に『デモクラシア』が報じたところでは、この2人はリンヴィルとストレインで、昨年マニラ野球リーグに歩兵第13連隊チームの一員として参加していたという[246]。しかし、この時点ではまだ2人の処分は決まっていなかった。同日、『ケーブルニューズ・アメリカン』紙は「国際競技で起こりうる最悪の出来事」だと強い調子でこの事件を報じた[247]。さらに社説でも次のように論じた。現在フィリピンではアマチュアの地位が

---

[242] William Tutherly, “The World at Play,” part I, chap. 3. 実際、当時の新聞で伍廷芳の始球式に言及したものはない。

[243] *Manila Times*, February 7, 1913.

[244] 中沢不二雄「マニラ遠征日誌」。

[245] 山村一郎「マニラ遠征の想い出」。

[246] *La Democracia*, February 6, 1913.

[247] *Cablenews American*, February 6, 1913.

確立されていないので、プロの選手が故意に、あるいはそれと知らずアマチュアだと称してアマチュアの競技に参加することがある。（中国の抗議があった）サッカーも問題だが、こちらはアメリカのアマチュア競技の威信にとっていっそう破壊的だ。日本は50年前にアメリカの影響のもとで競技の世界に登場し、「日本人は他のどんな国にもましてアメリカに指導を求め、アメリカのスポーツマンシップの質について全幅の信頼を置いてきた」からである[248]。アメリカ人にとっては、フィリピン人も、中国人も、日本人も、みな自分の生徒であった。アメリカ人は極東の人々を指導すべき立場にあり、大会を通じてそのことを示すためにも、自ら模範的に振舞う必要があった。『マニラ・タイムズ』も社説で、大会の存続は、競技者のアマチュアの地位の潔白を維持することにかかっていると述べた[249]。プロフェッショナルの問題は、アマチュアの理念を揺るがし、アメリカの指導的地位に疑問符を突きつけるという点で、極東オリンピックの根幹に関わる大問題だったのである。

一連の報道を受けて、ベル将軍は陸軍を代表して声明を発表し、事件の詳細については全く知らないが、その処置については委員会の決定に従うと述べた。その一方で、他人から聞いたという形で、フィリピンで誰をプロとみなすかは難しい問題であり、見解もバラバラであると弁明した[250]。また陸軍のプロチーム全陸軍のマネージャーも、自分たちはこの件と関係がないことを宣言した[251]。この背後には、フィリピンでのアマチュアをめぐる確執があった。ブラウンは積極的にアマチュア主義を提唱し、フォーブズ総督の弟が所有する『マニラ・タイムズ』も彼を支持して、アマチュア肯定の議論を掲載してきた[252]。これに対して、陸軍はブラウンの唱える厳格なアマチュア主義に対して強い不満を抱いていた。両者の確執はこのあとPAAF内の主導権争いへと転じていく。

アマチュアの問題が注目されたもう一つのきっかけは、大会直前の1月28日付ニューヨーク電だった。ストックホルムオリンピックでアメリカ代表として五種競技と十種

---

[248] "Sportsmanship," *Cablenews American*, February 6, 1913.

[249] "The Olympic Protests," *Manila Times*, February 6, 1913.

[250] *Cablenews American*, February 7, 1913.

[251] *Manila Times*, February 7, 1913.

[252] "As to Amateurism," *Manila Times*, November 13, 1912 など。

競技に参加して圧倒的な記録で優勝し、スウェーデン国王から「世界一すばらしい選手」と称えられたソープ（Jacobus F. Thorpe）が学生時代にセミプロチームで試合をしていたことが判明し、AAU がアマチュア資格を剥奪し、IOC が金メダルを剥奪することを決定したことが報じられた。当時、学生が夏休みにお金をもらって試合に出るのは一種の慣行となっており、ソープ個人の問題ではなかった。そのため、ソープを支持する人々も少なくなかった。しかし、オリンピックでの活躍とネイティブ・アメリカンという出身があだとなり、スケープゴートにされたのである[253]。この事件はオリンピックがアマチュアのものでなければならないことを強く印象づけた。ソープ事件は白人と非白人の対立を背景にしていたが、フィリピンではアマチュアを巡って白人同士が対立していた。陸軍を告発したのも、アマチュア支持派のアメリカ人だったと思われる。結果として、明大と陸軍の試合は 9 対 0 で明大の勝利となり、陸軍の当事者は営倉入りの処分を受けた[254]。

陸軍を告発したのはフィリピン人だった可能性もある。次の文章を見ていただきたい。

> 比律賓は近く独立するを得べしとの考へなり。競技において日本人に勝つを得ば、是れ戦勝国たる日本より比律賓人の強きことを意味すとて、盛んに比律賓人は土人に声援を与ふるより、白人は日本人に声援を与へ、白人と日本人の競技に際しては、比律賓人が日本選手に声援するなど、互に声援の競争をなしたるは滑稽なりき[255]。

フィリピン人と日本人の試合でフィリピン人が勝利することは、独立を求めるフィリピン人に大きな自信を植え付けることになる。それはアメリカ人にとっては好ましからざることであり、アメリカ人は日本を応援することになった。一方、白人と日本人の試合では、フィリピン人の観客たちは見かけもよく似た日本人が白人を打倒することに期待した。それによって、日頃のアメリカ人に対する不満を晴らそうとしたのである。とりわけ陸軍はフィリピンの武力鎮圧に従事していたことから、フィリピン人

---

[253] Mark Dyreson, *Making the American Team: Sport, Culture, and the Olympic Experience*, University of Illinois Press, 1998, pp. 170-174.

[254] 駿台倶楽部明治大学野球部史編集委員会編『明治大学野球部史』18 頁。

[255]『大阪毎日新聞』1913 年 2 月 26 日。

の民族主義的感情をかき立てたであろう[256]。とするなら、陸軍の勝利を素直に喜べなかったフィリピン人がアマチュアの問題を持ち出して陸軍の勝利を取り消させたという可能性もなくはない。

オープン戦の他の試合に触れておこう。明大とフィリピン人チーム、メラルコとの一戦は延長戦にもつれこみ、メラルコがサヨナラ勝ちすると4,000人のフィリピン人応援団は熱狂のあまり一斉にカーニバル会場に繰り出してパレードし、夜遅くまで祝いあった。フィリピン代表は直前に選抜されて合同練習がほとんどできなかったので、負けたのは当然だった[257]。メラルコこそ真にフィリピン人の力を示したのである。明治大学は6チーム中3位の成績でオープン競技会を終えた。その後、PAAFの特別の許可を得て、プロチームであるオール・フィリピノと3戦した（1勝2敗）。同チームはこの年4月に日本に遠征する。それはフィリピン人チームで最初の海外遠征であった。こうして、フィリピン、アメリカ、日本を結ぶ野球の国際ネットワークのなかに、フィリピン人が加わることになった[258]。

陸上競技

前半は中国の健闘が目立った。2月6日の時点で20対19とフィリピンとほぼ互角の戦いだった。韋煥章は120ヤードハードル走と走高跳で優勝したほか、220ヤードハードル走で2位に入った。潘文炳は十種競技に優勝し、五種競技で2位、走幅跳で3位に入った。張春齢も前評判通りの強さを見せ、立高跳と十種競技で2位、棒高跳で3位に入った。陳彦は走幅跳に優勝した。一方、フィリピンはトラックで圧倒的な強さを見せつけ、ハードルこそ牙城を崩されたものの、100ヤードから880ヤードまで1、2位を独占した。なかでもセブ高校のロビリョスは100ヤードと220ヤードの2冠を達成した。『第十回極東大会報告書』に掲載する成績一覧には誤りが多いので、表3に整理しておく。

マラソンはマニラ市北郊のバリンタワクからスタートし、リサール通りを南下、パ

---

[256] Gerald R. Gems, *Sports and the American Occupation of the Philippines*, p. 134.

[257] *Manila Times*, February 8, 1913; *Philippine Free Press*, February 15, 1913.

[258] ハワイの日系人野球チームAsashiは早くも1905年に日本、台湾、フィリピンに遠征していた（Gerald R. Gems, *The Athletic Crusade*, p. 72）。

表３　陸上競技成績一覧

種目	１位	２位	３位	記録 *6
100 ヤード	Pio Robillos	José Lozada	Numeriano Rojas	10.8
220 ヤード	Pio Robillos	G. Quintano	邱紀祥	23.6
440 ヤード	Vicente Macairan	Victorino Abrera	許民輝	56.2
880 ヤード	Paulino Sumarines	Villariña	葉桂馥	2:16.2
１マイル	田舎片善次	劉明義	Maximo Borja	5:05.2
マラソン	田舎片善次	井上輝二	李文昌	29:41.8
120 ヤード障碍	韋煥章	黄元道	*5	18.0
220 ヤード障碍	José Lozada	韋憲章	Ebro	28.8
880 ヤード継走	Philippines*1	中国 *2		1:37.2
１マイル継走	Philippines*3	中国 *4		3:50.0
走高跳	韋煥章	Diosdado Salcedo	Aliermo	5.5 5/8
立高跳	M. Santos	張春齢	Ballisteros	4.4 3/4
走幅跳	陳彦	C. Cardenas	潘文炳	19.11 1/8
立幅跳	P. Tolentino	胡宏華	M. Santos	9.8 1/2
棒高跳	Remigio Abad	楊錦魁	張春齢	10.6 7/8
砲丸投	Regino R. Ylanan	高恩養	J. Coscuella	35.3 1/2
円盤投（16lb）	Regino R. Ylanan	Emilio Samson	Felix Rosado	92.9 1/4
五種競技	Regino R. Ylanan	潘文炳	Paulino Sumarines	266
十種競技	潘文炳	張春齢	Margarito S. Torralba	598

*1 Paz, Rojas, Enriquez, Robillos
*2 許民輝、関頌声、潘文炳、邱紀祥
*3 Castañeda, Abrera, Atillo, Lizares
*4 関頌声、黄灝、葉桂馥、李文昌
*5 Lozada 失格、張春齢棄権のため該当者なし
*6 トラック競技は分：秒、フィールド競技はフィート.インチ、五種・十種競技は点

シグ川を越えてルネタのカーニバル会場に入り、最後にトラックを２周するという全長５マイルのコースで競われた。バリンタワクは1896年にボニファシオがスペインに対して反抗に立ち上がった場所でフィリピン革命発祥の地として知られる。『デモクラシア』は、そこが「96年の我々の英雄」のために建設されたモニュメントの近くであるとわざわざ記している[259]。一方、ルネタはリサールの処刑地で、いまはカーニバルの主会場となっていた（この年末にリサールのモニュメントが完成する）。このコース取りには明らかに政治的な含意があった。ボニファシオが立ち上がったのは、「現地住民たちのさらなる進歩」を阻害した「スペイン人の犯した大きな間違い」のためであ

[259] *La Democracia*, February 6, 1913.

る[260]。リサールの処刑はさらに大きな間違いといえよう。こうして、東洋人のランナーはスペイン人の間違いの跡をたどることで、アメリカ植民地政策の正当性を確認するはずだった。

他の競技が入場料を払わないと見られないのに対して、「バリンタワク競走」は沿線で自由に観戦できた。そのため、フィリピン人のみならず、マニラ在住の日本人、中国人も多数応援に駆けつけ、それぞれの国旗、すなわちアメリカ、日本、中国の国旗を振って歓声を上げた[261]。田舎片は2位の井上に4分以上の差をつけてダントツの1位でゴールインした。このときのスタンドの様子を『大阪毎日新聞』は次のように描写している（井上自身が記したものだろう）。

> 始め我が田舎片選手が最先にその颯爽たる英姿を式場に現はし、井上選手又これに続くや、群衆歓呼は場を震撼すると共に、日章旗は高く微風に翻へり、更に美しき五色旗は掲揚せられ、同時に同胞応援隊は国旗を振つて満場唯これ狂するが如かりき。田舎片、井上両選手は毫も疲労の色なく、微笑を含んで我応援隊の贈れる花環を肩に掛け、折柄の夕陽を浴びて悠然場内を一周したる時ンば、同胞と外国人とを問はず、その勇姿を賞揚するにおいて殆んど熱狂の極度に達したるなり[262]。

3位の李文昌ら他の選手たちが疲労困憊の状態でカーニバル会場に入ってきたのに対し、田舎片と井上はすぐに2回目のレースをしても勝てるくらいの余裕があった。田舎片は三井物産マニラ支店長の三神敬長の通訳でインタビューに応じ、最大の敵は暑さであったが、早めにマニラに来て日々練習したおかげで克服できたと語った。この17歳の少年はよほど記者の注意を引いたらしく、母校愛知一中の校長がスポーツに熱心なことや、校内の20マイルレースで田舎片が2連覇したことなどが詳しく紹介されている[263]。これには田舎片が人力車夫だという噂を否定する（＝アマチュアであること

---

[260] デイビッド・バロウズが公立高校用に編纂した『フィリピンの歴史』に見える言葉。レイナルド・C・イレート「一八九六年革命と国民国家の神話」（レイナルド・C・イレートほか『フィリピン歴史研究と植民地言説』9頁）を参照。

[261] ブラウンによれば、25,000人の観衆が沿道で応援した（Elwood S. Brown, “Far Eastern Olympic Games”）。

[262] 『大阪毎日新聞』1913年2月16日。愛知一中競走部編『愛知一中競走部史』一中競走部史編纂室、1966年、87-89頁にも詳細な記事がある。

[263] *Manila Times*, February 6, 1913.

を証明する）目的があったと思われる[264]。

結局、陸上競技はフィリピンが65点、中国が40点、日本が11点で、フィリピンが大勝した[265]。個人の最多得点は砲丸投、円盤投、五種競技に優勝したイラナンで、次が潘文炳、3位は日本の田舎片であった。中国が振るわなかった理由について、韋煥章はまず台風による船酔いを挙げ、「どうして船酔いした競技者たちが、上陸してたった1日休んだだけで、オリンピックのような厳しい競技で立派なことができるだろうか」と述べる[266]。彼らは1月31日にマニラ入りしたが、最初の競技は2月3日だったから、これは事実とは異なる。もっとも日本（田舎片と井上は17日にマニラに到着していた）やフィリピンの選手に比べれば確かに不利ではあった。第二の理由は気候で、とくに短距離走者は大きな影響を被った。また運営の問題について、船が小さかったこと、静かで快適なホテルにいる日本人と違って映画館の隣の騒々しくて混雑したホテルに滞在しなければならなかったことを挙げる（ウィルバーによれば、6人1部屋だった[267]）。最後に資金の関係で、優秀な跳躍の選手2人、長距離選手1人、バスケットボールチームを連れてくることができなかったと述べる[268]。

陸上競技で特記しておかねばならないのは高校生の活躍である。大会期間中、高校記録は13種目のうち11種目で新記録、1種目でタイ記録が生まれた。そして高校記録を極東オリンピック記録、およびオープン競技会記録と比べると、比較可能な9種目中6種目において高校記録が他の2つの記録を上回っている[269]。カーニバル競技会の3つの競技会のうち高校選手権のレベルが最も高かったことになる。実際、陸上競技のオープン競技会で優勝したのは高校選抜で、教育局（欧米人主体）、フィリピン大学、マニラYMCAが続いた。陸上競技に関する限り、フィリピン人高校生はすでに在比欧米人のレベルを抜き去っていたのである。しかしこれによってアメリカ人は優越感を失ったわけではない。『フィリピンズ・フリー・プレス』は一方で3つの競技会のうち

---

[264] *La Democracia*, February 6, 1913.

[265] 採点法については注282を参照。

[266] 彼らが乗ったイギリス船Yingchouはフィリピン海域で行方不明となり、アメリカ海軍巡洋艦に救出された（*Manila Times*, February 1, 1913）。

[267] F. E. Wilber, “Oriental Olympiad.” ウィルバーは敗因として、人数、暑さ、船酔いを挙げる。

[268] Wei Hwen Tsang, “China in the First Far Eastern Olympiad.”

[269] *Manila Times*, February 12, 1913.

高校選抜が優れているという記事を載せながら、もう一方で「東洋の競技者が西洋の競技者と張りあうことができるようになるには長い年月がかかるだろう」と述べる記事も載せているからである。バーバも言うように、こうしたステレオタイプは「すでに知られ常に「そこにある」もの」であり、「歴史や言説の局面が変わっても」「反復可能」なのだ[270]。

その他の競技

水泳はマニラホテルにほど近いレガスピ埠頭の海岸でおこなわれた。中国の選手は昨秋以来泳いでいないので相当なハンディを抱えていた[271]。結局、水泳はフィリピンの独り舞台に終わった。得点数でいうと49対2、中国チーム唯一の得点は馮啓明が220ヤード平泳ぎで2位に入りマークしたものだった。160ヤードリレーは泳ぎ切りさえすれば、タイムにかかわらず2位の得点2点が入るはずだった。しかし、馮啓明が痙攣をおこして棄権したため、得点0に終わった[272]。フィリピンチームで活躍したのはベニテスとデル・パンである。中国には楽勝したフィリピンチームであったが、オープン競技会は苦戦し、マニラYMCAをはじめとするアメリカ人が強さを見せつけた。ベニテスとデル・パンはここでも気を吐き、後者は半マイルで優勝した[273]。

バレーボールは7日にフィリピンと中国の試合がおこなわれ、フィリピンが21対0、21対7で勝った[274]。中国はもともとバレーボールに参加するつもりはなかったが、フィリピン側の要請で参加した。選手の一人邱紀祥の回想では、一部の選手はバレーボールをしたことがあり、コーチからはボールを地面に落とさず、両手でボールをネットの向こうにはじきかえせばいいというアドバイスをもらっただけで、ルールもわからないまま試合に臨んだ。それでもこれが世界で最初のバレーボールの国際公式試合となった[275]。オープン競技会には10チームが参加し、マニラ実業高校が優勝した。

---

[270] *Philippines Free Press*, February 15, 1913. ホミ・K・バーバ『文化の場所』116-117頁。

[271] F. E. Wilber, “Oriental Olympiad.”

[272] *Manila Times*, February 6, 1913.

[273] *Manila Times*, February 8, 1913.

[274] *Cablenews American*, February 8, 1913; *Philippines Free Press*, February 15, 1913.

[275] 袁偉民、張彩珍主編『中国排球運動史』武漢出版社、1994年、35-36頁にもこの試合に関するやや詳しい記述があるが、その信頼性については若干問題がある。たとえば同書は中国側が陸

バスケットボールは7日の午後4時、すなわちバレーボールの試合のすぐ後におこなわれ、フィリピンが26対8で中国を一蹴した[276]。中国チームは陸上競技とサッカーの選手からピックアップした即席チームであり、郭宝根、莫慶、張栄漢らはこの日バレーボールに続く2度目の試合だった[277]。オープン競技会では5チームが競い、マニラYMCAが3連覇を果たした。

テニスは中国から4名の選手が参加したが、みな1回戦でフィリピン勢に敗れて姿を消した[278]。韋煥章によれば、中国のテニスコートは芝だったのに対して、フィリピンのそれは貝殻と砂を固めてつくったものだったので、中国選手はスピードの早いボールのコントロールに苦しんだ。韋は芝のコートならフィリピンは相手にならないと強がっている[279]。決勝はファルガスとスアレスで、スアレスが優勝した。2人はともにラオンラアンクラブの会員だった。オープン競技会のシングルスではファニングが元日本チャンピオンのチャップマンを破って優勝し、ダブルスではファニング＝ジー組がファルガス＝スアレスのフィリピン人ペアを破って優勝した。なお、オープン競技会では男女ペアのダブルスが導入され、欧米人女性が初めてカーニバル競技会に参加した[280]。

自転車は10マイルの距離で競われ、フィリピンが1～3位を独占した。この結果に

上競技とサッカーの選手を寄せ集めたが16人に満たなかったので12人制で実施されたとするが、他の資料にそのような記述は見られず、試合直前にコートで撮影されたと見られる中国のバレーボールチームの集合写真（ミネソタ大学 Kautz Family YMCA Archives 所蔵）には18人の選手が写っていることからも、当初の予定通り16人制でおこなわれたと見るべきである。また同書は試合の結果を第1戦（21対10、21対20）、第2戦（21対9、21対17）とするがこのようなスコアを記した資料はなく、初めてバレーボールに挑む中国がこれほどの接戦をしたとも思われない。なお、このときバレーボールに参加した選手たちは帰国後にバレーボールの普及に取り組んだ（拙稿「なぜ baseball は棒球と訳されたか」）。

[276] 大日本体育協会編『第十回極東大会報告書』71頁はフィリピンの2勝、中国の2敗とし、張彩珍主編『中国籃球運動史』武漢出版社、1994年、25頁は中国が24対25、18対57で負けたとするが、いずれも誤りである。

[277] 張彩珍主編『中国籃球運動史』246頁。

[278] 劉吉主編『中国網球運動史』武漢出版社、1999年、31頁に中国は第1回極東大会に参加していないとあるが誤りである。

[279] Wei Hwen Tsang, “China in the First Far Eastern Olympiad.” ウィルバーもまったく同じことを述べている（F. E. Wilber, “Oriental Olympiad”）。

[280] *Manila Times*, February 1, 1913.

ついて韋煥章は、中国選手はマニラの広くて平坦な道路を走るのに適した自転車を持っていなかったため、どうしようもなかったと述べている[281]。

極東オリンピックの最終的な結果は、フィリピンが129点、中国が42点、日本が14点で[282]、スポーツの歴史が最も浅いフィリピンが「極東の疑う余地もないチャンピオン」となった。中国チームは陸上競技と水泳で個人的な活躍がみられたものの、一つの選手権も獲得できなかった。日本は野球の選手権を獲得したにとどまったが、出場した競技はすべて優勝した。ブラウンによれば、極東オリンピックの観戦者数は75,000人にのぼった[283]。

オープン競技会は極東オリンピックやフィリピンの高校選手権大会と並行して開催され、オリンピックの各競技に加えて、ボーリング、クリケット、ゴルフ、ハンドボール、レスリング、ポロ、レガッタなどの競技が実施された。欧米人の参加が多く、上海の欧米人も参加した。そんななか、極東オリンピックに参加した選手もオープン競技会に参加した。フィリピンの高校選抜が陸上競技を制したことは先述したが、中国人選手も参加し、韋煥章が走高跳で2位、高恩養が円盤投と砲丸投で3位、楊錦魁が棒高跳で3位に入賞した。サッカーはボヘミアンクラブと中国で争われた。野球には明大とフィリピ

---

[281] Wei Hwen Tsang, “China in the First Far Eastern Olympiad.” これもウィルバーが同じことを述べている（F. E. Wilber, “Oriental Olympiad”）。モリスは、中国は自転車競技に参加しなかったと述べるが誤りである（Andrew D. Morris, *Marrow of the Nation*, p. 252）。

[282] 当時はおおまかな基準しか公表されていなかったためか、資料によって点数はまちまちである。ここで採用したのは、*Manila Times*, February 10, 1913; *La Democracia*, February 12, 1913; E. S. Yule, “The Great Far East Olympiad” の数字である。このほか、*Philippines Free Press*, February 15, 1913 はフィリピン129点、中国44点、日本14点、*Cablenews American*, February 9, 1913; *North-China Herald*, February 13, 1913 はフィリピン131点、中国42点、日本14点、“The Olympic Meet,” *Philippine Education*, vol. 9, no. 9, March, 1913 はフィリピン137点、中国42点、日本11点、大日本体育協会編『第十回極東大会報告書』3頁はフィリピン141点、中国42点、日本16点とする。*Philippine Education* はマラソンを個人競技としているために若干異なるが、他については陸上競技と水泳の点数は一致している。第2回極東大会の採点法は、個人競技（テニスのダブルスとリレーを含む）は1位3点、2位2点、3位1点、五種競技、十種競技、マラソンと団体競技は1位5点、2位3点、3位1点とし、競技者が3人（チーム）のときは上位2人（チーム）分、2人（チーム）のときは上位1人（チーム）分を採ることになっていた。この採点法で計算すると、『第十回極東大会報告書』に一致する。

[283] Elwood S. Brown, “Far Eastern Olympic Games.” この数字にはオープン競技会、高校選手権の観戦者も含まれているかもしれない。

ンの高校選抜が参加した。後年のオープン競技会（選手権大会終了後に開かれた）は「おまけ」みたいな存在になって注目度も高くなかったが、今回のオープン競技会は、とくに英語新聞では、極東オリンピックと同じくらいの注目を集めている。これはカーニバル競技会の歴史（フィリピン人競技のほうが「おまけ」だった）を考えてみれば納得がいくであろう。極東オリンピック、オープン競技会、高校選手権大会に出場した選手の数は1,513人にものぼった[284]（ストックホルムオリンピックは2,437人）。

表彰式

2月8日夜、約200名の選手役員がマラカニャン宮殿に集まった。PAAF会長のフォーブズ総督は挨拶のなかで次のような挨拶をした。

> 競技場での勝利は勝利者に成功の芽生えを告げ、のちの人生でのさらなる大きな勝利を示すのであります。しかし決してドルの追求を紛れ込ませてあなたがたのスポーツを損なってはなりません。いま終了したばかりのこの大会が、隣り合う国々の人々が一緒になるという点で、他のものの先駆けとなることを希望します。太平洋のこちら側の人々が互いを理解し、緊密なビジネスの関係を築いていけば、太平洋の広大な水の砂漠は、やがてこれらの国々の国際貿易を営む船舶で活気づくことでしょう[285]。

またもや「ビジネス」である。実業家でスポーツマンのフォーブズ総督にとって、ビジネスとスポーツは切り離せないものだった。なによりも両者はフェアプレイの精神、すなわち機会均等やルールに基づく公正な競争を基本原理としていた。ビジネスとスポーツと民主主義を兼ね備えた総督は理想のアメリカ人男性――このようなイメージは侵略者としてのアメリカ人（とくに兵士）像を払拭するためにも重要であった――であるとともに、フィリピン人が目指すべき国民（＝男性）の理想でもあった。フォーブズから見れば、フィリピン人はビジネス、民主主義、スポーツのいずれにも問題があった。

「恩恵的同化」を掲げていたにもかかわらず、フォーブズはアメリカ人とは違った形

---

[284] Elwood S. Brown, “Far Eastern Olympic Games.”

[285] *Manila Times*, February 10, 1913.

でフィリピン人を教育しようとした。フォーブズ総督とホワイト教育局長（Frank White）のもとでフィリピン人の教育は職業教育――工業技術の修得と手工芸品の生産――が重視された。その意図は、フォーブズのような実業家ではなく、アメリカ主導の資本主義経済に奉仕する労働者を育成することにあった。民主主義養成の場である公立学校は、フォーブズ総督期に大幅に削減された[286]。フォーブズはフィリピン人の政治能力を信用せず、フィリピン議会との対立を深めた。これに対して、スポーツは事情がやや異なった。フォーブズはスポーツを通じてビジネスと民主主義を学ぶよう繰り返し述べたが、スポーツは他の２つと違ってフィリピンにおけるアメリカの権益を直接脅かすことはなかった。またスポーツは優劣が明確に示されるが、フォーブズは他の在比アメリカ人と同じく、スポーツにおいてもアメリカ人が絶対的に優位であることに疑いを持たなかったから、スポーツに関してはよい教師でいられたのである。

フォーブズはPAAF会長としてプロフェッショナリズム（「ドルの追求」）に釘を刺すとともに、総督として、また実業家としてスポーツの交流を通じてビジネスチャンスの拡大を求めた。しかし、「ドル外交」という名のもとで積極的な外交を展開し、満洲鉄道中立化構想や清朝に対する英米独仏四国借款団を通じて中国への関与を強め、日本やロシアと対立していたのは、まさしく当時のタフト政権であった。とするなら、アマチュアやフェアプレイの理念は、このようなアメリカの帝国主義的意図を覆い隠す役割を果たしたことになる。それは、「恩恵的同化」や「文明化の使命」を掲げてフィリピン植民地支配を正当化したのと同じ手口であった。

フォーブズは１年近くにわたるアメリカ滞在から帰国したばかりであった。フィリピン人の自治能力の欠如を確信するフォーブズは、独立を求めるフィリピン議会と激しく対立し、苦しい政権運営を強いられていた。前年には民主党のウィルソンが大統領（彼のもとでフィリピン人化政策が推進されることになる）が選挙に勝利し、彼の総督任期も終わりに近づいていた[287]。アメリカ議会ではフィリピンの独立を約束するジョーンズ法が審議されていたが、タフト大統領はこれに反対していた[288]。

---

[286] Gerald R. Gems, *Sport and the American Occupation of the Philippines*, pp. 135-136.

[287] フォーブズは1913年９月に帰国、後任にはハリソンが就任する。

[288] *Manila Times*, December 7, 1912. 同紙は極東オリンピックの直前にも社説でジョーンズを批判している（“An Invitation to Mr. Jones,” *Manila Times*, January 30, 1913）。大統領がタフトから

本国とフィリピンで権威の危機にさらされていたフォーブズにとって、極東オリンピックは福音だった。なぜなら、アメリカの旗の下に戦ったフィリピンが優勝したことは、彼にとっては、アメリカ植民地統治、より厳密に言えば、共和党の植民地政策の成果であり、それを内外に誇示することで植民地支配を正当化するとともに自己の権威を強化することができた。しかし、フィリピン人にとってそれはまったく違う意味を持っていた。『デモクラシア』の社説は、アメリカ人の関与が大幅に減少するなか、今回のカーニバルはフィリピン人の協力によって大成功に導かれたと主張した。それはとりもなおさず、ラテン文明とアングロ・サクソン文明という２つの全く異なる文明に適応できるフィリピン人の能力を示すものだった。アメリカの貢献が大きいことは認めるが、もしフィリピン人をもっと参加させていれば、フィリピン人の進歩はもっと容易で速かったはずである[289]。こうして社説は、カーニバルの成功をフィリピン人の能力の証明ととらえ、アメリカ植民地政府（より具体的にはフォーブズ総督）にフィリピン人のいっそうの政治参加を求めたのである。ここから類推するならば、フィリピン人にとって、極東オリンピックでの優勝は、自分たちが精神的にも身体的にも民主主義政治に参与する能力があることを示すものだった。実際、英語とスペイン語で刊行されていた『フィリピンズ・フリー・プレス』は、本稿冒頭に掲げたように「オリンピアードは民主主義そのものだ」と述べている[290]。極東大会を通じた支配と抵抗のせめぎ合いは以後の大会でも続けられる。

ここで忘れてならないのは、このせめぎ合いに、フィリピン人選手は直接関わっていないことである。それどころか、彼らの声はその痕跡すら見あたらない。これに対して、中国と日本の選手は声を出すことができた。ただし、中国の選手は自国語ではなく、英語で声を上げざるをえなかった。このことは、中国の半植民地的状況の一つの現れであった[291]。

ウィルソンに代わった後、1913年10月にジョーンズ法は下院を通過、最終的に1916年8月29日に成立する。

[289] "El Pasado Carnaval," *La Democracia*, February 11, 1913.

[290] "The New Olympian. Los Nuevos Juegos Olímpicos," *Philippines Free Press*, February 1, 1913. この記事とこの記事に付随するイラストについては、Stefan Huebner, "Images of Sportive 'Civilizing Mission'" を参照。

[291] 拙稿「なぜ baseball は棒球と訳されたか」。

フォーブズ総督の挨拶に続いて表彰状と賞品が授与された[292]。野球の優勝者に贈られる大銀杯は明大野球部主将斎土直矢がフォーブズ総督から受け取った。フォーブズ総督寄贈の陸上競技杯はフィリピン陸上競技チームキャプテンのイラナンが受け取った。フィリピンの政財界を代表するオスメーニャとテオドロ・ヤンコはそれぞれバスケットボールとテニスの優勝杯を寄贈した。バレーボールの優勝杯はアメリカのスポーツ用品会社スポルディングが寄贈したものであった[293]。スポルディングにとって極東オリンピックはアジアでの販路拡大に重要な意味を持っており、自社製品の宣伝の好機ととらえていたはずである。極東オリンピックのあとしばらくして上海の大学競技連盟がマニラから200ドル分のスポーツ用具を購入したのも宣伝の効果だったかもしれない[294]。

2月9日、日本、中国、フィリピンの代表が集まって極東体育協会の総会が開かれ、次期会長に伍廷芳を選出し、1915年に上海で第2回大会を開催することを決定した[295]。

一足先にマニラを発った田舎片と井上両選手は2月17日に神戸に着き、翌朝に上陸した。まず波止場で歓迎を受けたあと、湊川公園で神戸市長や神戸駐在米国領事らが出席して歓迎式典がおこなわれた。花で飾られた電車に乗って大阪入りした一行は花で飾られた車にのってパレードし、15,000人の観衆が集まった中之島でふたたび歓迎会が開かれた。大阪府知事代理、内務部長、大阪市長らが来賓として招かれた。夜には大阪ホテルで毎日新聞社による歓迎会に出席、まさに英雄の凱旋であった。中之島での様子を『大阪毎日新聞』はこう伝える。

> 両選手を乗たる阪神の花電車は風を切つて到着。歓呼！大歓呼！！数万の大衆動揺めく所、花輪を手にせる田舎片、井上両選手は莞爾として花電車を降り来り、

---

[292] 駿台倶楽部明治大学野球部史編集委員会編『明治大学野球部史』口絵に、森田茂選手の表彰状の写真が掲載されている。金メダルの写真は（http://www.olympic.cn/museum/collection/2014/1128/24329.html）を見よ。メダルの図柄が象徴する意味についてはStefan Huebner, *Pan-Asian Sports and the Emergence of Modern Asia*, pp. 50-52を参照せよ。

[293] *Manila Times*, February 10, 1913.

[294] "Athletic Goods from Manila," *St. John's Echo*, vol. 24, no. 4, May, 1913.

[295] *Manila Times*, February 10, 1913; *Cablenews American*, February 11, 1913. 大日本体育協会編『第十回極東大会報告書』3頁は2月10日とするが誤り。なお会期はその後1914年に変更されるが、第一次世界大戦の勃発により、再度1915年に変更された。

歓迎者の目前にその英姿を現はせば、再び起る大歓呼、音楽隊の歓迎歌奏曲、拍手の響き、歓迎旗の閃めき、是等の響きがごつちやになりて駅前の一区は崩れ立つやうな光景を呈せる[296]。

歓迎会の様子は写真付きでほとんど一面を費やして報じられた。一行はこのあと伊勢神宮で凱旋報告を行い、田舎片選手は地元の名古屋でまた歓迎を受けたのである。『大阪毎日新聞』は極東オリンピックをメディア・イベントとして最大限に利用したといえよう。明大野球部も早大、慶大の選手や校友ら5,000人に出迎えられ、人力車に乗って東京の街を練り歩いた[297]。明大は極東オリンピックの映画をお土産に持って帰った[298]。これがその後どのように活用され、どのような反響を生んだかはわからない。中国の代表も映画を持ち帰った[299]。ただ中国の場合、代表団が上海と香港でどのように迎えられたのかはわからない。

極東オリンピックの反応はさまざまだった。フィリピンでは大々的に報道されたが、その成功の意味するところをめぐってアメリカ人とフィリピン人が対立した。中国では英字メディアが極東オリンピックに高い関心を示した。その読者にとって、極東オリンピックは従来の香港・上海対抗戦の延長だったであろう。これに対して中国語メディアは概して冷淡だった[300]。中国語メディアは極東オリンピックだけでなく、スポーツそのものにまだ関心を示していなかった（1915年に上海で開かれる極東大会が一つの転換点となる）。日本では賛否が分かれた。大日本体育協会はその後もしばらく非協力的な姿勢を崩さなかった。国際オリンピック委員会会長クーベルタンも、第1章で見たように、極東オリンピックに否定的だった。極東オリンピックそのものは成功理に終わったが、その前途は決して洋々としてはいなかったのである。

---

[296]『大阪毎日新聞』1913年2月19日。

[297]『東京日日新聞』1913年2月28日、山村一郎「マニラ遠征の想い出」。

[298]中沢不二雄「マニラ遠征日誌」、『東京朝日新聞』1913年2月26日。

[299]"Far Eastern Olympic Games," *The North-China Herald*, February 22, 1913; Amos N. Hoagland, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1913,"（『中国年度報告』6巻、26頁）。

[300]『申報』1913年12月21日、「東亜運動会第一次大会紀」など。

おわりに

1907年夏、依然として反植民地戦争が継続するなか、アメリカ植民地政府はアメとムチの政策――フィリピン議会の選挙とマカリオ・サカイの処刑――によってこれを「鎮圧」しようとしていた。米軍の高官がカーニバルの開催を提案したのはまさにこのような時であった。カーニバルは民族の融和と経済の発展と健全な娯楽の提供を目的としたが、フィリピンの安定と繁栄を国外にもアピールするために、当初から国際的な催しとして企画された。そしてカーニバルの競技会もまた当初から東洋のオリンピックとして構想された。カーニバル競技会は、セントルイスオリンピックで開かれた「人類学の日」と同じく[301]、スポーツの面を通じてアメリカを頂点とする人類の秩序を再確認し、その「文明化の使命」の成果を国内外にアピールする役割を果たした。

極東オリンピックはブラウンの独創ではなかった。彼はそこにYMCAの理念とネットワークを持ち込んだ。ブラウンはマニラに着任以来、スポーツを通じた「文明化の使命」を推進し、厳格なアマチュア主義の実行を提唱してきた。しかし彼の唱えるアマチュア主義は在比アメリカ人の間に広く受け入れられたわけではなかった。陸軍や一般のアメリカ人はプロフェッショナル、すなわちドルと勝利の追求に寛容だった。フォーブズでさえ、表向きは「文明化の使命」を支持していたが、カーニバルの闘鶏を黙認したように、二者択一を迫られた場合、ドルの追求を優先したのである。そうではあるが、フォーブズとブラウンとブレント、すなわち植民地政府とキリスト教（YMCAと監督派教会）は、「文明化の使命」（前者は同化、後者は改宗が最終目標だった）を掲げている限り、協力することができた。彼らはいずれも筋肉的キリスト教（Muscular Christianity）の提唱者であり実践者であった[302]。だからこそ、カーニバル競技会と極東オリンピックは共存しえたのである。ブラウンもフォーブズも、そしてフォーブズの後を継いでPAAF会長となったブレントもアメリカ帝国主義の一翼を

---

[301] ブラウンは「人類学の日」を知っていたと思われる。そのちょうど一か月前にブラウンはホイートン大学のバスケットボールコーチとして、セントルイスオリンピックのバスケットボール（公開競技）に参加していた。

[302] アメリカの筋肉的キリスト教については、Clifford Putney, *Muscular Christianity: Manhood and Sports in Protestant America, 1880-1920*, Harvard University Press, 2001を参照。

担っており、みなフィリピン人の反発を招いた[303]。フォーブズやブレントに対する批判は個人的なものも含まれていた。ブラウンの場合、そのスポーツ事業は好意的に受け入れられたかもしれないが、フィリピン人の（カトリックからプロテスタントへの）改宗はほとんど成果が上がらなかった。

「文明化の使命」は根本的な矛盾を抱えていた。なぜなら、「植民地支配の「他者」を「文明化」しつつも、他者にはその固定的な他者性を保持」してもらわねばならなかったからである[304]。アメリカ植民地政府は他者の同化を先送りすることで、植民地支配を正当化した。文明と野蛮は「たえず動かされる境界線」であった[305]。これに対して、フィリピン人は同化の達成を主張することで、「即時独立」すなわち植民地支配の清算を要求した。カーニバル競技会と極東オリンピックは、その国際性ゆえに、植民者と被植民者がそれぞれの主張の承認を求める格好の舞台となった（新参の植民地帝国アメリカは、植民地の正当性と「文明化の使命」を遂行する能力について、とりわけ国際的な承認を欲していた）。そこでは、家父長的なアメリカ人の指導のもとで、政治的にも、経済的にも、そして身体的にも発達したフィリピン人が国内外に展示され、アメリカの優越性と植民地支配の正当性を印象づけた。一方でフィリピン人はそれを文明化の達成の証拠と位置づけ、独立を要求した。アメリカ化したフィリピン人という擬態は抵抗の拠点と植民者の権威を掘り崩す契機を提供したのである[306]。

極東オリンピックという、当時の世界を見渡しても類例のない国際競技会が誕生したのは、アメリカによるフィリピン植民地支配の独特のあり方によるところが大きい。以上に述べた他にも、植民地政府がスポーツによる「文明化の使命」の遂行を積極的に推進し、国際競技会に必要な普遍的理想、知識や経験、人材のネットワークを持つYMCAを全面的に支援したことが挙げられる[307]。YMCA、なかでもブラウンの国際主義的、平等主義的志向は極東オリンピックをフィリピンの文脈から引きはがし、（アメリ

---

[303] ブレントについてはGerald R. Gems, *Sport and the American Occupation of the Philippines*, p. 93を参照。

[304] アーニャ・ルーンバ著、吉原ゆかり訳『ポストコロニアル理論入門』松柏社、2001年、213頁。

[305] ホミ・K・バーバ『文化の場所』71頁。

[306] もっとも、独立をめぐる闘争の真の舞台となったのはアメリカの議会であり、極東オリンピックが果たした役割は間接的で象徴的なものにとどまった。

[307] Stefan Huebner, *Pan-Asian Sports and the Emergence of Modern Asia*, p. 22.

カ主導の）新しい地域秩序を体現する媒体に変えた。それが顕在化するのは、極東オリンピックの舞台がフィリピンを離れる第二回大会以降のことである。極東オリンピックのその後については、稿を改めて論じることにしたい[308]。

[308] 本稿の執筆に当たっては、Stefan Huebner 氏から多くの示唆と有益な指摘を得た。ここに感謝の意を表する。